
真の神、理をもって愛となせ

XL—エクセル—

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真の神、理をもって愛となせ

【Nコード】

N8230V

【作者名】

Xトーエクセル

【あらすじ】

こんな名前……私は大嫌いだ。名前を変えたいと思っていたら、そこにジジイが現れて――。

真神理愛 編1

「——じゃあ、リア！ 追ってこいよつ、俺、待ってるから……お前が追いつくまで、俺は待ってるから！」

私が今を生きている理由。

私の今が、とっても熱い理由。

私は彼に追いつきたい。

私は彼に追いついて、そして——。

暑い……。暑すぎる……。

とても暑い。当たり前だ、今は夏、しかも絶好調に夏。

八月の太陽が照りつける。七月と八月といったら、どっちが暑いのだろう。

そんなどうでもいい私の思考を、油蝉達の愉快すぎる合唱がかき消していく。

愉快すぎる。本当に。暑さが増して、苛々してくる。

なんにしても直射日光が、一番の天敵だと思える。

ママに渡された麦わら帽子。自分で言うのもアレな話だけど、今時の子の私には、古くさい麦わら帽子は嫌だった。

もっと可愛らしい帽子の方が良かった。

ちなみに私はとある私立高校に通う、現役女子高生だ。

現在、十六歳。あと数日で、十七歳になる。高校二年生である。

夏休みの補習の為、とろけるような暑さを放っている、コンクリートの道路を、せつせとこいでいる。実に哀れだと思える。

ところで私の名前——いや、聞きたくはないでしょ？

「早くしなよ、真神理愛！」

……あちゃあ。

「遅えぞ、田中っ」

……うわちゃあ。

できれば名乗りたくなかった。いや、無かった事にしたかった。私の名前は、田中真神理愛、といいます。ちなみに読み方は「しかりあ」です。

正直なところ、あまり、いえ——かなり好きじゃないです。むしろ嫌いです。

普通の名前が良かった。それが幼き日から思い続けた、私の唯一変えたい願いです。もしも願いが一つだけ叶うならば、自分自身の名前を変更したい。

しかも田中という、日本人ならばよくある名前、これが余計に真神理愛の名前を際立たせる。

余談だけど、男子は田中、女子は真神理愛と、大声で呼んでくるから、また困る。私を知らない人間も、簡単に私を覚える。

——そうこうしている内に、学校へと到着する。

この時期に学校へ来る輩は、補習組が部活組、あるいはその他に分類される。

もう一度言うけど、私は落ちこぼれの補習組。笑いたければ笑うがいいつ。

——あ、結構むかつくな。

自転車を置き、とぼとぼと歩いていると、元気に走り回る集団が見える。

あれは確か——サッカー部か陸上部だろう。野球とかラグビーとかの、体格ではない事は確かだ。

「あつ……」

思わず声が出た。

私の視線の先には、とある人がいたからだ。

「あ、田中——さん？」

「は、はいっ……」

この人がいるという事は、テニス部だ。
サッカー？ 陸上？ 細かい事を気にしてたら、何もできないですよ。

神宮寺聖夜さん。高校三年生で、二年生の私からすれば憧れの先輩。

今時風ないわゆるイケメン先輩か、というと思う。私が言うのも失礼だけど、並みより上、といったところだと思う。

これまたいわゆる、ミーハーとかがない。その代わりに好きな人は、相当好きになる。かくいう私も、その中の一人だ。

身長178？で、細マッチョに分類される、整った体つき。私からすれば、何故この人に人気がないのかわからない！

——ライバルが少なくて良いかもだけど。

「この時間から登校して事は、補習組だな？」

「あ、はい……補習組……です」

恥ずかしい。カッコ悪い。

それも何も、この学校の補習組は、特別な理由がない限り、基本的には勉強のできない馬鹿ばかりだからだ。

噂によると、神宮寺さんは相当頭が良く、進路も相当良いところに進むとか。

既に私が懂れていい存在じゃない。

「ははは、ちゃんと勉強しないと駄目だぜ？　じゃあ、俺行くから」

「は、はいっ、頑張つて、くだ……さい」

神宮寺さんは、その体つきに見合った、軽快な動きでグラウンドに走っていく。

流れる汗すら美しく見えてしまう私は、ほぼ末期症状だろうね。

軽快な神宮寺さんを見た後、私は私を見つめてみる。

「痩せた方が良いかな」

中肉中背。そう言えば聞こえは良いけど、特徴のない体型だ。

胸の大きさだって、同年代にしては小さい。小さいのはステータス、そんな言葉もあったけど、やっぱり小さいのは武器にならない。

髪型だって今時、三つ編みだ。三つ編み、麦わら帽子、中肉中背。駄目だ、地味としか言いようがない。

「はぁ……」

溜め息だけは一人前だ。

「——こらぁ、真神理愛！ 遅刻だぞ！」

「はぁいつ、今行きます！」

補習担当の先生。大きい声で、真神理愛って呼ぶなっつての。

「何か言っただか、真神理愛！」

「行きます、行きますっつてば！」

何で心の声が聞こえるのよ。

「それはな——先生、だからだ」

もう意味わからん。

補習をやる事、およそ一時間半。

あまりの気温の高さから、補習は途中中止になった。補習なのに、そんなんで良いのかな。

そんな私の良い子な考えは、更に暑さを増した太陽と、更に激しく合唱する蝉の鳴き声によって、一瞬にして無かった事になる。

「帰ろう……。帰って、麦茶飲んで、クーラーの効いた部屋でゴロゴロして、扇風機にアーっやって……それから……」

どうしよう。

ふと耳に、乾いた炸裂音が入ってくる。

すぐにそれはテニスボールが、打ち返される音だとわかった。

「神宮寺、さん」

テニスコートで、さっきの軽やかな動きの中に、激しさの加わった、神宮寺さんのプレイ。

素人の私にも、その動きがとても凄いものだど、嫌でも実感できる。

勉強もできて、スポーツもできる。そんな文武両道な人間が、い

るんだとも実感できた。そしてやっぱり、私では不釣り合いな人なのだと実感した。

結局、実感できた事は、嫌な事でしかない。

「帰ろ……」

自転車置き場にある、自分の自転車を取りに行き、そのまま真っ直ぐに家に向かう。

——その夜、私は何度目かになるか、わからない程聞いた、自分の名前の由来をママに聞いた。

「ねえ、ママ」

「ん……………」

ママはお風呂上がり。濡れた髪を乾かそうと、ドライヤーと悪戦苦闘している。

「私の名前ってさ、何でこの名前なの？」

「なんだい、またそれかい？ 何回も説明したでしょ？」

「お願い、最後に一回」

ママは一度、咳払いをした後に、

「真の神、理をもって愛となせ」

と、答えてくれた。

その後は、ただ黙って髪の毛を乾かしていた。

この真神理愛という名前の由来は、こんな感じだけど、理由は単純なものだった。まあ、由来自体が、意味のわからないものだけ。理由は被らない、かつ、かつこいい名前にしたかった、だそうです。なんて迷惑な。

真神理愛。本当に嫌な名前。こんな目立つ名前なんて、いらなの。

強いて嬉しい事といえば、神宮寺さんと同じ、神、の共通文字がある事だ。

「神、か……。神様なら、私の名前をもっと普通で可愛いのに変えて、神宮寺さんと両想いにさせてよ！」

叶うわけがないでしょ。

なんて一人突っ込みしながら、私は眠りについていった。
その日は、不思議な夢を見た。

聖夜 編1

俺は神宮寺聖夜。とある私立高校に通う、三年生だ。

所属クラブはテニス。これでもレギュラーをやらせてもらっている。

今日も朝練があり、朝五時半から練習を開始。この尋常じゃない暑さで、練習をしていかなければならない。

それが普通といえば普通だが、嫌だといえば、本音であるところは正直だろうな。

「——おっ、そろそろ九時だぜ。来るかな来るかな、ぐしし」

この薄気味悪い笑いをしているのは、俺ではない。当たり前だ。自分でいうのもアレだが、俺はこんなキャラじゃない。

こいつの名前は「岡島誠也」だ。そう、字の違いはあれど、名前が一緒なのだ。テニス部なのに、坊主頭。まあ、似合ってるから良いのかもしれない。

「お、きた！」

どうやら岡島の目当てが来たようだ。

ようだ、といっても、その正体は俺も知っている。——二年生の田中真神理愛さんだ。

その平凡な名字と、奇抜な名前で、この学校ではある意味で有名なのだ。

本人にとっては、失礼な話だが、その奇抜な名前の割に、見た目は中肉中背、顔も可愛いが特筆すべき点はない（失礼）。唯一、あるといえば、今時で三つ編みという髪型ぐらいか。

他の女子生徒は、有名アイドルを真似たり、茶髪に染めたりしているのに、古風である黒髪三つ編みは、ある意味特徴的だといえる。「おいおい、田中さん、こっちを見てるぞ！俺を見てくれてるのかなっ、ちょっとランニングのふりして、近寄ってみようぜ」

「あ、おい、岡島！」

仕方のない奴だ。

そう心の中で呟きながら、俺は本心である好奇心に勝てなかった。何故なら俺は——彼女の事が気にかかっていたからだ。

明確に好き、という感情があるのかはわからない。ただ異性として、気になる人だった。ただ眺めていれば良い、ただ一目で良いから見れば良い。

ただ——それだけだ。

そんな考え事をしながら、岡島を追いかけていたら、目の前に田中さんがいた。まずいな、どうやら接近しすぎたらしい。

そんな彼女も、驚いた瞳を向け、

「あつ……」

と、一言。いや、あつ、って会話にならないっての。

だがここは先輩たるかつこよさを見せようと、冷静にフォローしてみせた。

「あ、田中——さん？」

フォローになってないし。

事実、次に彼女から返ってきた言葉も、「は、はい……」で終わった。

会話が続かなく、どこか居心地の悪さを感じさせる。見ると田中さんもそうなのか、もじもじとした仕草を見せる。

完全に失敗だな。——と思ったが、さっき岡島の言っていたネタがあった。そろそろ九時、つまりは補習だ。

恐らく田中さんは、補習でここに来たのだろう。部活ならば、もっと早いはずだし、友達との待ち合わせなら私服のはずだ。

だが彼女は制服だ。という事は、補習しかないんだ。

「この時間から登校って事は、補習組だな？」

「あ、はい……補習組……です」

まずい。大失敗だ。

この学校では補習組＝落ちこぼれ、の図式が成り立つのが一般的だ。

現に田中さんも、目に涙を溜め、恥辱に耐えているような表情をしている。ように見えなくもない。

これでは下級生を虐める上級生の図式だ。
なんとかしないと――。

「ははは、ちゃんと勉強しないと駄目だぜ？　じゃあ、俺行くから」

「は、はいっ、頑張つて、くだ……さい」
フォロー、できただろうか。

これ以上、会話を長引かせても墓穴を掘るだけ、と判断して、俺はとっととグラウンドに走り去る事にした。

「神宮寺い」

「えっ――？」

「勉強がトップクラスにできるお前が、あの台詞はないよ。嫌味に聞こえたんじゃない？」

「あ、あんなんで！？」

「女は男と違うからさあ」

彼女いない歴と年齢が、一緒の貴様に言われたくないわ。
だけど、女心って難しい。

俺も彼女がいなかったわけじゃない。でも、付き合ってた経験があるからって、女心がわかるわけではないわけさ。

むしろ付き合った事によって、尚更わからなくなっただっていうか。

「あああああ、わかんねえ！」

「な、何だよ！？」

「うるさい！」

何をこんがらがってんだよ、神宮寺聖夜。

俺と彼女は、全くの他人。彼女からすれば、俺の存在なんて――
例えば数千分の一なわけで、いや、数万分の一かな。

だから俺なんかが、ここまで神経使う必要はないんだよ。彼女は

――田中さんは、俺なんかよりも凄いやつと付き合っただけで、結婚して、子供作って――。

あれ、何か嫌な感じだな。

「——神宮寺！」

「えっ……！？」

気がつくと、俺はテニスコートに立っていて、岡島の豪速球を目の当たりにしていた。

さすが我が校のテニス部誇る、ダブルスエースプレイヤーかつ、スーパーパワーシューターだ。

「ぼおっとしてんなよっ、次行くぞ！」

「あ、ああ、どっからでも来い！」

そうだ、今は夏の大会に向けての練習だ。色恋話なんて、その後で良い。

その後——その後に、そんな暇なんてあるんだろうか。

「お疲れっした！」

後輩達の、気合い満点な挨拶が響く。運動系で青春を過ごしている俺にとっては、この挨拶の声が心地よかった。

時刻は昼前。でも今日は誰とも付き合いたくなかったから、俺は逃げるように自宅へと帰った。

——シャワーを浴び、練習の汗を流して、昼飯を胃に流し込む。夏によくある冷や麦だった。

食べ終わるのと同時に、自分の部屋に雪崩れ込み、朝起きたままの布団に、その身を預ける。ほのかに汗臭い。

そしてポケットから携帯電話を取り出すと、おもむろにある文字を打ち込んでいた。

「た、な、か、し、か、り、あ——田中、真神理愛。——じ、ん、ぐ、う、じ、せ、い、や——神宮寺聖夜。って、何やってんだ俺！」
打ち込んだ文字を消して、俺は携帯を適当に投げた。変な音はしなかったから、壊れてはいないと思う。

それにしても、彼女の親はどうして真神理愛、と名付けたのだろうか。ちなみに俺の場合は、十二月二十五日生まれ、つまりは聖な

る夜、から取られて聖夜になったらしい。

真神理愛。一字はとても良い文字だが、どうしてこうなったのかは、皆目検討がつかない。

真神理愛。真神理愛。そんな彼女の名前を呟きながら、俺はいつの間にか、睡魔という誘惑に負けていたらしい。

真神理愛 編2

ああ、良い気持ち。ここはどこだろう。何だか全体的に白いところだけ。

辺りを見回しても、人らしき存在も確認できない。それはそれで寂しいし、なんか怖い。

「——きゃあっ！」

何か嫌な感覚が、お尻周辺に感じられた。凄く嫌な感じだ。後ろを振り向いた時、私はある意味で絶句した。

「ハローオ、ピチピチ女子高生。ええ尻じゃ、見た目が地味じゃから、さわり心地も地味かと思っただわい」

えっ、尻！？

という事は、お尻に感じた嫌な感じは、お尻をさわられたからなの、かな。

てか、何でこんな失礼な事を、さわられた私が聞いているの。

さわったらしき野郎は、そのまんまスケベじいさんだ。頭のとっぺんがハゲで、中途半端に残った髪。ちなみに白髪だ。

漫画みたいな長い白髭が、ひよろひよろと垂れてる。漫画みたいな髭、どころか存在そのものの形が、漫画みたいだな、て。

おまけに漫画みたいに、ヒラヒラの白い古くさい服を着て、くたびれた杖をついている。

「——というのが、お前さんの考えじゃな」

「えっ、何でわかつちやったの！？」

「当たり前じゃろ。ワシを誰だと思っただのじゃ」
スケベじい。じゃないの。

「地味な割に、随分と口の悪い娘じゃ。ワシはな、聞いて驚けよ」
あんたも手癖の悪いじいじや。と、思おうとしたけどやめた。
じいじ、もとい、おじいさんは、長い溜めの後、静かに放屁をした。

「すまん、はっはっは」

「いえ……」

「下ネタは嫌いかい？」

「好きではありませんね」

下品な笑いを浮かべて、おじいさんは咳払いした。手で口を押さえ、
えていなかったたので、私は思わず息を止めてしまった。

私は失礼だろうか。

「ワシはな、神様じゃ」

「えええええっ!？」

と、というのが一般的だと思う。

事實はただ絶句というのが、本当のところだ。だってそうでしょ、
神様ってもつとこう、神々しいというか。

これじゃ、本当にただのスケベじじいだ。

「お前さん…… 本当に失礼な奴じゃの」

いきなり女性の体——しかもお尻を触ってきた方が、失礼だと思
うけど。

「まあ良いわ。ワシは神じゃから、この程度の事は許してやるわい。

…… 時間もないわけじゃしな」

「時間？ 何かあるの？」

「何、ここはお前さんの夢の世界じゃ。お前さんが夢から覚めると
いうのは、一種のタイムリミットになるわけじゃよ」

なるほど。ここは夢の世界。

夢ならば、お尻を触られた事も、仕方がないから許そう。癪だけ
ど。

「それでな、ワシがお前さんの前に現れたのは、他でもないんじや
よ」

この展開、漫画とか小説の物語みたい。ちよつと古いような気も
するけどな。

この後、おじいさんが何かをくれたりするんだよね。多分。

「恋する心を持った、初々しいお前さんの為に、魔法の力を授けて

やろうと思つてな」

ほらね。やっぱり何かくれるんだ。しかも魔法の力、ファンタジーな感じだね。

まあ、夢の世界だから、ここでしか使えないけど。

そんな現実で魔法が使えるなんて、ありえないもんね。そんなものが使えるなら、科学の力なんていらないもん。なんてね。

「……お前さん、信じとらんな？」

「いえいえいえっ、信じていますよ！」

夢の世界でだけね。

と思おうとしたけどやめた。忘れるとこだったけど、おじいさんは心を読む。

私の夢の世界の住人なんだから、私の心がわかるのは当たり前だよな。

この世界は私そのものなんだもん。

「まあ、良いわ……。信じようと信じまいと、一度しか言わんから、耳の穴をかつぽじってよく聞けい」

私は「はい」と答え、その場に正座した。正座はなんとなく。

「——この魔法の力は、願いを叶える力。どんな願いでも、必ず叶えてくれる。但しっ、死んだ人間を甦らせる、や、一般的じゃ願いを増やせ、は禁止事項じゃ」

「それじゃ、どんな願いでも、が成り立たない気が……」

「ええい、五月蠅いわい。こんな事は、人としてのマナーとかモラルの問題じゃろうて。屁理屈も聞かんからな」

ぶっ飛んだおじいさんだけど、そんな口から「マナー」とか「モラル」の言葉が出たのは驚きだ。

「でも願いを叶える魔法の力かあ、いっぱい叶えちゃいますよ！」

夢の世界で、だけどね。

「いや、いっぱいは無理じゃ」

「えっ、どうしてですか？」

「当たり前じゃろ。お前さんに能えた力の限度では、叶えられる数

は二つまでじゃ」

二つまで。何て中途半端。

一つとか三つとか、もっと扱いやすい数があったらうに。五つでも良いけど。

「叶え方は、願いを念じるだけで良い。口にしても良いがな」

「はい、わかりました」

「うむ。ではそろそろ時間のようじゃ、お前さんは夢から目覚める。また会える事を楽しみにしとるよ」

おじいさんは、最後にそんな事を言い、これまた漫画みたいに、スーッと消えていった。

セクハラじじい。誰がまた会うもんか。

「聞こえとるぞ」

あら……。

——何にしても、せつかく魔法の力なんて、眉唾物の力を貰えたけど、夢から覚めちゃうんじゃ、使い物にならない。

良いところで目覚める。夢なんてそんなもんだよね。

でもどうせだから、願い事の一つでも言ってみようか。まずは――
！。

「じゃあ……真神理愛って名前を、カタカナでリアって名前にして
！」

ちなみにリアってのは、ネットを使う時の私のネーム。案外気に入っているんだ。

それにカタカナでこういう名前だと、ファンタジー世界のキャラの名前みたいだね。

そして私の意識は急速に目覚めていった。

「……ア、……ッア。起き……リア……！」

ママの絶叫。もとい、起こしてくれる母の声。

でも朝が弱い私には、ママの絶叫は応える。

「いい加減に起きなさいっ！ リアッ！」

「……えっ！？」

寝ぼけ眼が、一気に覚めた。

「やっだねえ、この子は。寝ぼけてるのかい、ママがこんなに起こしてやってるのにさ」

「ママ……今、私の事を何て呼んだの？」

「え……何てって……リアはリアでしょ？」

ママは私の事をリアって呼んだ。

私とは正反対に、真神理愛って名前をこよなく愛していたママが。絶対にどんな時でも、私の事を真神理愛って呼んでいたママが。

「あのジジイ……いや、御爺様。まさか、本当に……！？」

御爺様の魔法は、本当だったらしい。

という事は、使える魔法はあと一回。もう叶える魔法はアレしかないでしょ！

真神理愛 編3

数日前、まだ夏休み中の事です。

私は変な夢を見て、その中のジジ——御爺様から、願いを叶える魔法の力、を授かりました。

魔法の力を使う時の、制約もあります。一つは願い事は二つまで。一つは「人を生き返らせる、あるいは殺す」といった願い事不可。そして最後に一つは「願い事の数を増やす、減らす」といった数に関わる事も不可、というものです。

その力の発動条件は、私が願いを強く念じる、もしくは言葉にする。

私は魔法の力を使い、既に一つ目の願いを叶えました。

「おはよつ、リア！」

「うん、おはよう！」

田中真神理愛。改めて、田中リア。

私自身は大変満足しています。

そうです。一つ目の願いは、名前を真神理愛から、リアに変える事です。他の人から見れば、何ともしっくりない願いですが、私にとっては凄く大きな問題です。

名前が変わった当初は、驚きと困惑。ママが私をリアと呼んだのが始まりだったけど、九月になって、本格的に学校が始まり、友達みんなにリアって呼ばれて、やっと実感できました。

——さて、ここで最後の二つ目の願いをお披露目です。

「リア、何ニヤニヤしてんの？ ぶっちゃけキモいよ、ちょっと……」

「え、あ、えつ、いや大丈夫、気にしないで！」

キモいですが、そーですか。

友達にも言われてしまったけど、気にせずに二つ目の願い事を、ね。

二つ目の願い事は――。

「やっぱりまだ秘密!」

「だから何よつ、リアはさ!」

この後、友達数人から白い目で見られたのは、言うまでもない事。

――そして放課後。

今日も何も無い一日。いつもと変わらない一日。何も起こらない事は、逆に幸せともいうけど、ね。

そういえば私、先月の二十九日に、十七歳になりました。どうでも良い事ですけどね、誰に祝ってもらえるわけでもないですしね。

「……あれ?」

家に帰ろうとする私の目に、とある光景が見えた。

校舎の影に隠れるように、二人の男子生徒が、何かをしている。何をしているのだろう、と歩行を遅くして、その光景を見つめる。

無性にドキドキするのは、私が野次馬だからだろうか。

だけど二人の男子生徒を確認して、私の好奇心からくるドキドキは、違うものになんて変わった。……

「あれって……」

神宮寺聖夜さん。と、そのご友人だ。

何をしてるんだろう。表情を見る限りは、真剣だけど喧嘩をしているわけではなさそう。何かを相談している……?

何を、相談しているんだろう。別にやましさはない。

ただ――私に協力できる事なら協力したい。いや、協力させてください。

なんて言えるわけもない。私と神宮寺さんは、そんな関係ではない。

神宮寺さんは優しいから、こんな私に声をかけてくれるし、名前も覚えてくれている。私みたいに個人的に、好意があるわけではない。

「はぁあ……」

私は人知れずに、深く大きなため息を吐いた。

帰ろう。自転車をこいで、いつものように帰宅する。そしていつものように晩御飯を食べて、いつものようにお風呂に入って、いつものようにメールチェック、いつものように好きなテレビを見る。

いつものように――布団に入る。

でも、いつもとは違うものが、私にはあるはずだ。夢の中で会った、御爺様の事を思い出す。

そう私には、願いを叶える魔法の力がある。その願いの力は、あと一つだけあるんだ。

「その一つが……悩みものなんだよね……」

一人で愚痴を呟くように、天井に話しかける。よく見知った天井だ。

もったいつけたけど、私のもう一つの願い事は……神宮寺聖夜さんと、両想いになる事だ。でも、本当に良いのだろうか、そんな自問自答をし続けて、最初の願いを叶えた日から、数日経ってしまっ

た。
本当は誰もが、本当の恋と、本当の勇氣を持って臨む試練なんだ。魔法を使うという事は、その試練から逃げるという事だ。

私は、そんな事をして神宮寺さんの心を手に入れて、一体何がしたいのだろうか。ただ神宮寺さんの心を、一人で独占したいだけなのだろうか。

でも時間が経つ毎に、変わっていくものがある。神宮寺さんが好きという気持ち、これは嘘偽りない気持ちなんだ。

段々と鼓動が高なる、胸が締め付けられるように痛い。何故か涙が出てしまう。その度に、また胸が痛くなる。

辛い。辛すぎるよ。早くこの痛み、苦しさ、切なさから解放されたい。なら告白してみようよ、もう一人の自分が後押しする。

「……っ！」

私は唇を噛み締める。甘い誘惑に乗ってしまう事を、避ける為だ。もう一人の私が言う。大丈夫、きっと成功するよ、きっと付き合

ってる、きつと楽しい未来を歩んでる。

心の鍵を開きそうになる私に、釘を刺すように、更にもう一人の私が言う。

——でも、ふられてしまったらどうしよう。きつともう恥ずかしくて、神宮寺さんとは話す事がなくなるのは当然として、目も合わせなくなると思う。

そんなのは嫌だっ。……嫌な自分。結局は私はワガママだ。神宮寺さんの気持ちなんて、まるで考えていないんだ。

全ては自分が苦しみから、解放されたいだけなんだ。自分のエゴの塊を、ぶつける事しか考えていないんだ。

「……すー……すー……」

気がつけば私は眠っていたらしい。そして、また「あの夢」を見る事になってしまった。

更に次の日、まさか私に告白という大舞台が訪れようとは、夢以上に夢にも思わなかったんだ。

聖夜 編2

——夏休み、夏の大会。

文化系には無縁の話かもしれないが、運動部の俺、正確には俺達には、学生生活の大きな比重を占める出来事だ。俺の所属するテニス部。強豪ではないけど、弱小でもない。何とも中途半端なポジションにいます。

優勝を目指せるわけではないけれど、より良い順位を目指す為に大変な練習をこなしていく。

ただ残念ながら、最後の夏の大会となった俺達は、前年の順位よりも大きく下回ったものとなってしまった。出された結果は悔しい。でも当然なんだろうなって思えて、ふと気が軽くなってしまった。

その理由は、大きく二つある。一つは俺達が戦った相手の学校は、その年の優勝学校となった。ダークホース扱いされていたのは知っていたが、まさかあれ程強いなんて予想外だった。

俺もシングルならば、そこそ腕に自信があったけど、見事に叩き折られた。まあ、これで完全に今後の進路の為に歩めるわけだ。

そしてもう一つの理由は――。

「神宮司！」

こいつだ、岡島誠也。

しかも何故か鼻息が荒いぐらいに、気合いが入っている。部活を引退した身なのに、随分と暑苦しい奴だ。いや、引退したからこそ、なのかもしれないけど。

岡島は俺と違い、テニス部を――いや、テニスというスポーツを愛していた。俺もテニスが好きだったけど、とても比にはならないと思う。岡島はそんな奴なんだ。

そんな奴だからこそ、俺は岡島が許せなく、憎めなかった。

――時は数日前に戻る。夏の大会、一回戦目を順調に突破して、二回戦目に進んだ俺達。ちなみに、この二回戦目で負けてしまった

んだ。

ダブルスプレイヤーであり、我が校の主力選手である、岡島誠也は単刀直入に言っと、試合の日の前日に食べた物があたらしく、腹痛の為にコートの中に岡島の姿は見えなかった。岡島がいれば勝てたのか、と言うと無理だっただろう。だが結果的に最後の大会となった試合に、よもや体調管理不足からくる腹痛により、欠場というあまりに馬鹿げた出来事に、俺は少なからず怒っていたんだ。

岡島誠也という男は、それ程に才能もあつた有力選手だったんだ。「おいっ、神宮司！」

「わかつてる、聞こえているよ……」

騒がしい奴だけど、やっぱり良い奴だと思う。でも騒がしい。

「神宮司……ちょっとさ、相談事があるんだけどさ……」

「相談事？ どうした、元気が取り柄の岡島が、随分としおらしい態度じゃないか？」

「いや……その、さ……」

本当にめずらしい、岡島の態度。こいつはどんな時にもポジティブ思考で、基本的に落ち込む事なんてないはずなんだ。

一体何かあつたのだろうか。あつたから落ち込んでるんだろうけどさ。

「わかった。じゃあ放課後、話を聞いてやるよ」

「悪い、俺、ちょっとマジなんだよな……」

何がマジなのか。その時の俺には、わかるはずもない事だったんだ。

ただ一つ言える事は、岡島の相談事が、俺を揺さぶるものであつたという事だけ。

「——マジ悪いな、神宮司」

体育館の裏、というわけではないが、校舎裏の目立たない場所に、俺達は集まる事にした。

こんな人気のない場所に、野郎が二人いるという事で、少し注目を浴びてるように感じられる。喧嘩が何か始まるとでも、思われているのだろうか。

一応、俺にはその意思はない、アピールの為に、適当な場所に座る事にする。

「それで、何だよ用件は？」

早く帰りたいかった。

だけど岡島が相談してくるなんて、よっぽどの事だ。だから俺の答えは、とっとと終わらせて帰る。

からかつてる暇があるのなら、真面目に聞いて早期解決してしまおう、の作戦だ。

「その、な……その……」

「何だよ、岡島ともあるうものが、女々しくもじもじしやがって！」

岡島の反応から、長引きそうだと判断した俺は、いわゆるジャブ程度に煽ってみた。

「いや、それが……さあ……」

こいつは随分と手強い。そんなに言いにくい事なのか。

こうなったら、こっちから相談内容を当ててみよう、と考えた。

「まさか、恋愛？」

「うっ……！？」

マジか。それは裏表ない、心の声だ。しばらく唾然としてみると、岡島がやっと口を開いてくれる。

「その、さ、二年のさ……」

「下級生か、年下は可愛いもんな。で、何て名前なんだ？」

「……うう、神宮寺、誰にも言わないでくれよ」

「当たり前だ。口は固い方だから、安心してくれよ」

岡島は「それじゃ……」と、一息間を作ってから、ゆっくりとその言葉を吐き出した。

「——二年の……田中リア」

一瞬、目の前の岡島が、何を言っているのかわからなかった。い

や、わかっていないなかった。

とにかく言える事は、田中リアの名前を聞いた時、俺の心臓は大きく脈打ったという事だ。

「へ、へえ……田中さんか。どこが好きになったんだ？」

気を許せば、声が上がらずそうになる。心の同様を悟られまいと、必死に押さえつける。

部活に必死だった時は、その存在を忘れる事ができたけど、その名前を聞き、蓄積された感情が、一気に溢れだしていく感覚に気づかされた。勿論、錯覚かもしれない。

「そ、そりゃ、素朴な感じでさ、それで——」

一声を放って、心にゆとりができたのか、それ以降、岡島は田中リアに関する事を喋り続けた。

聞けば聞くほど、岡島がどれくらい彼女の事が好きなのか、思い知らされる事になった。

「——よしっ、決めたぜ、神宮寺！」

「何が……？」

「俺、明日の放課後にでも、田中さんに告るよ！」

激しく胸が高鳴った。痛みを伴う高鳴りだ。

「いや……岡島。それは早すぎじゃないか、そんなんじゃ田中さんも困るっていうか……」

彼女の事をよく知りもしないのに、俺は何を言っているのだろう。仮にも岡島の告白に、彼女がオーケーしたら、その結末を認めるしかない。それは当たり前だ。一体何を考えているんだ、神宮寺聖夜。

俺は一体——何がしたい。

「困るだろうな、突然すぎかもしれない。でも、俺はもう抑えきれないんだよ。田中さんへの気持ちがさっ、当たって砕けても良いんだ。俺の気持ちを、伝えたいんだ！」

岡島は叫び、力いっぱい感情を吐き出した。その感情の放出に、俺は気圧されてしまった。

「神宮寺、俺は家帰って、早速田中さん宛の手紙書くよ！ 聞いてくれて、サンキュなっ」

満足そうな顔をして、岡島は帰っていった。相談前が、まるで別人のようだ。

俺もまた、相談前とは別人のように、心の痛みを覚えていた。

真神理愛 編4

朝の登校、急ぎ足で下駄箱に向かった私に、驚きの出来事が待ち受けていた。

「え、誰……？」

なんと私の下駄箱に、男子生徒が何かをしている。何をしているのか、遠目にはよくわからないくらい、男子生徒の動きは奇怪なものだった。

チャイムが鳴る。話しかけるのが、怖いなんて言ってられない。時間を過ぎたら、もっと怖い先生に怒られてしまう。

「あのお……」

私は意を決して、その男子生徒に話しかける事にした。

「えっ、あ……田中、リアさん」

「はい、そうですけど……」

男子生徒は私を知っているみたい。でも私は、この人を知らないいや、でも覚えがある。この人は一体誰なのだろう。頭の中で必死に検索しても、やっぱりわからないでいる。

「あの、俺、岡島誠也って言います。そ、その、良かったら今日の放課後、話聞いてもらえないかな？」

岡島誠也さん。そうか、学校内でも有名な、テニスプレイヤーの岡島誠也さんだ。

学内新聞とかで、その容姿とかは見た事がある。そういえば、神宮司さんと一緒にいる事が多い気がする。

それに話を聞いてもらえないか、って事は――。その気がなくても、一瞬ドキッとしてしまう。

どうするべきだろう。やはり断っておくべきか、それとも話だけでも聞きにいくべきだろうか。こういう事にあまり慣れていない私は、適切な判断が下せないでいる。

そうこうしている内に、最後の予鈴が鳴ってしまった。

「やべっ、もうそんな時間か！？ ごめん、田中さん、放課後にここで待っていてくれないか？」

「え、あの、岡島さん！」

「それじゃっ！」

岡島さんは行ってしまう。その足の速さは、神宮司さんと良い勝負、いや更に速いかもしれない。さすが有名なスポーツ選手だなんて思う。

——なんて感心してる場合じゃない。私も急がないといけない。でも全速力で教室に向かったけど、結局は遅刻扱い。先生には注意だけされて、おとなしく席に着く事ができた。

そのまま午前四時間が経過して、お昼休み。私は今朝の岡島さんについて考えていた。決して神宮司さんから、心移りしたわけでもない。ただ純粹にどうしようかを考えていた。

「どうしたのよ、リア！」

「あ、ああ、香苗か」

「何よ、人がせっかく心配してあげてんのに、その態度はさ」

紹介が遅れてました。度々、私に話しかけてくれていた友達。雪村香苗。

あまり友達のいない私の、数少ない友達であり、よく私の悩み事相談や愚痴を聞いてくれる良い奴。でもたまに汚い言葉が出てくる事もある。でもやっぱり良い奴。

「三年生のさ……岡島さんって知ってる？」

「ああ、ここでは結構有名な岡島誠也さんでしょ。テニスがめちゃくちゃ強いよ」

そんなに有名な人なんだ。それが香苗の言葉で感じ取れた事だ。急いでいたからうる覚えだけど、顔立ちも男らしくて、とても頼り甲斐のありそうな印象だった気がする。

「まあ、神宮寺先輩が大好きなあんたには、どうでも良い情報だろうけどね」

「ふーん、って、何で香苗がそんな事知ってるのよ!？」

「おいおい……私を誰だと思ってるんだ。そんな事、ちょっと見ればわかるよ」

恐るべし、雪村香苗。

それとも私がわかりやすいだけなのだろうか。自分的には、隠すのは上手い方だと思っていたのだけだ。

「——で、岡島先輩がどうかしたの？」

「うん、と、それがね……」

私は今朝起きた事を、香苗に話す事にした。一人で悩んでいたって、答えは見えてはこない。だから人に相談するのが一番良いと思っただの。

何よりも香苗の判断は、すっぱりしていて悩みやすい私にとっては、本当に助かる。

「断れ！」

「いや、そうするつもりだけどさ、断り方ってものがあるじゃない？」

「そりゃそうかもしれないけど、あんたは神宮司先輩一筋なんだろう？」

私は首を縦に振る。

「だったら断るしかないでしょ。ここで変な感じになっちゃうと、色々嫌でしょ。だから何も考えずに、ごめんなさい、って言うちゃえば良いのよ」

「そっか、そうだね」

結局は断るのも、私の勇気次第になってしまっけど、香苗に話した事によって少しは楽になった。

ありがとう、香苗。——なんて言う間もなく、香苗は飲み物を買に行ってしまったみたいだ。

そして、緊張の放課後を向かえる。

岡島さんの言っていた通り、下駄箱付近で待っていると、約束通りに岡島さんもやってきた。

そこが緊張している表情を見ると、私まで緊張してしまう。せっかく香苗に緊張を解いてもらったのに。

「や、やあ、ごめんね待たせちゃったね」

「いえ、今来たばかりです」

昔ながらの恋愛話の良い雰囲気になった時、こんな会話になるけど、本当に今来たばかりなんだ。

「えと、それじゃあ、早速……」

「は、はい……」

岡島さんは、ここで言うてくるつもりなのだろうか。結構、人目について恥ずかしいのだけれど。

それに岡島さん自体が、有名な人だから、余計に注目を浴びてしまう。視線が痛い。

「俺、田中さんの事——」

いきなりそのフレーズ。単刀直入にも程がある。

それが良いって人もいるんだろうけど。何よりも岡島さんは、運動部だけに声が大きい。人目につく場所で、大きい声で、単刀直入すぎる出だし。

私は既に、精神的に追い詰められていたのかもしれない。

「ごめんなさい！」

私は大きな岡島さんの声を、更に上回る大きな声で、その言葉を出してしまった。

勿論、余計に視線を集めてしまったのは、言うまでもない事だった。

「私、他に好きな人がいます。だから……私、ごめんなさいっ！」

正直なところ、自分が何を言ったのか、ちゃんと喋れていたかさえもわからない。

だからちゃんと断れたのか、それさえもわかるはずがなかった。

でも岡島さんは、ふと笑みがこぼれて、

「そっか、他に好きな奴いるのか。あっはっは、マジショック、ショックだけど……頑張れよ」

それだけ言い、一礼をしてから、走り去ってしまった。

しばらく放心していた。岡島さんも、あまりにさっぱりしていたから、本当に何が起こったのかも理解していなかった。

それは私の日常の枠の外で起きた、非日常の出来事だったからかもしれない。ただ岡島さんが言ってくれた「頑張れよ」の一言。

この一言が、私に小さな勇気を与えてくれたのだ。

次は私が勇気を出して、神宮寺さんに告白しよう。——とは言
うものの。

やっぱり私は弱かった。

真神理愛 編5

「——ただいまあ」

岡島誠也さんとの出来事から数十分。私は無事に自宅へ帰りつき、その玄関をくぐった。

手洗いとうがいを済ませて、麦茶を一杯。その後、真っ直ぐに浴室へ。

八月が終わったからといって、暑さも終わるわけじゃない。むしろ残暑が、私の体力を奪い、水分も奪っていく。

つまりは汗を大量にかいた私は、この汗を流して、さっぱりしたかったのだ。最も、浴室も外気温と湿気のせいもあり、息苦しい暑さを保っている。

汗により湿り気を帯びたシャツや下着を、乱雑に投げ捨てていく。私は冷たいと感じられるぐらいの、ぬるま湯に温度調節をして、ただ無言でシャワーを浴び続けた。

——時間にすれば数分だと思う。適当にシャワーを切り上げ、生暖かい浴室から出ていく。

「あ、しまった……」

私は着替えを持たずに、ここへ来てしまったらしい。どうするべきだろうか。私の部屋までは、すぐの距離だけど、誰かに見つかる可能性もないとはいえない。

私の家は、裸で彷徨く事など、タブーに等しい。見つかったら雷鳴が轟くだろう。

だからといって、先程脱ぎ捨てた、下着を身に付けるのも、どうにも気が引ける話だ。

「……仕方がないっ！」

私は意を決した。誰にも見つからない事を祈り、裸で部屋まで駆け抜けるのだ。

人の気配を鋭敏に探り、息を潜める。一体裸で何をやっているん

だろう、と冷静に思いながらも、眈々と議會を伺う。

「今しかない！」

今にも爆発しそうな心臓を抑え、一気に部屋へと走る。緊張状態だと、全ての些細な音が、足音に聞こえてしまう。

けどそんな考えも、良い方向に虚しく、私は無事に部屋へたどり着いた。電光石火の速さで、タンスを開けると、新しい着替えを用意する。

「ふう……」

嫌な汗をかいた。いずれにしても、汗をかく必然だったみたいだ。ハンドタオルで汗を拭き、ベッドに身体を預けた。

暑さで快適、とまではいかなかったが、布団に寝転がるとすぐに睡魔が襲ってくる。夕飯までの間、少しだけ仮眠を取るのも良いかもしれない。

何よりもずっと続いている、胸のドキドキをできるだけ早く、落ち着かせたかったのもある。

寝て覚めれば、このドキドキも、少しはおとなしくなってくれるだろうか。

「地味娘、元気にしとるか？」

最悪。思わずそんな事を考えてしまう。

せつかくの告白という、夢のある体験をさせてもらえたのに、いきなりこれはない。

「お前さん……本当に相変わらずじゃのう……」

目の前にいるのは、自称神様。でも私に夢を叶える魔法を、授けてくれたから本当に神様かもしれない。

まあ、この御爺様が何者であろうと、私には関係のない事だ。

「関係ない、と言い切れるのかね？ ワシは仮にも、お前さんに魔法を与えた存在じゃ。それに魔法を使った事による、いわば副作用のようなものがあるかもしれんぞ」

この言葉を聞いて、私の脳裏に戦慄が走った。そうだ、私は魔法の力を今のところは、無償で与えられている。

でも本当に無償かはわからない。もしかしたら、驚くべき副作用があるかもしれないのだ。私の行いは、あまりにも浅はかすぎた。

「嘘じゃよ。うそうそ」

ウザッ、と感じた私の感性は、間違っていないと信じたい。しかも表情もあからさまに、からかっているのが、余計にウザさを増している。

「本当は願いを叶える程の、ランクな魔法だけに、副作用はあったりするんじゃないかな」

「どっちなんですか？ そんな副作用なんて、恐い言葉を出してきて……」

私は内心、パニックっていた。いや、顔にも出ているかな。

「本当は、という話じゃよ。お前さんののは、色々と制約があるのでな、そんな恐いもんなんて、ありやせんよ。唯一、良い忘れがあるとするならば、魔法を持っていたら期限かのう」

この人は一体何を言っているのか。

魔法を持っていたら期限、って相当重要なものではないのか。だって期限切れになってしまったという事は、悩んでいる一つの願いが叶わないって事になる。

「それで、期限っていつまでなんですか？」

「期限、か……」

「はい、教えていただけませんか？」

自称神様は俯き、しばらくそうしたまま、数分の時間だけが過ぎていく。心なしか唸っているようにも。

そして自称神様は、ゆっくりと口を開いた。

「——忘れたのう。最近は何忘れが酷くての」

そんな馬鹿な。そんな肝心な事を、忘れてしまうなんて。これでは魔法を使える期限がわからない。

「でも確か、一ヶ月ぐらいじゃったと思うんじゃないか……」

「い、一ヶ月……！？」

本当に期限が一ヶ月だったのならば、私が魔法を使える期限は、もう何日もないはずだ。

確か、魔法を使えるようになったのは、八月の中旬。今は九月の中旬に差し掛かっている。恐らくはあと数日間のみ。

——もう迷っている時間はない。

「お前さん、何をそんなに焦ってるんじゃ？」

「私には……叶えたい願いがまだあるの！」

「ほほう、名前を変更する他にも、何かあったのか。どれどれ、ワシに聞かせてみせい」

このジジイ、私の心を読めるはずだから、私の二つ目の願い事も知っているはずなのに、わざと聞いてきてるな。

「ひゃっひゃっひゃ！」

これ見よがしに、変な高笑いまでしている。絶対に確信犯だ。

でも、そんな事を言っている場合でもない。魔法の力が消えたら、私は神宮司さんと——。

「何々、一発勝負してみれば良いんじゃないよ。勝負なんて勝つか負けるか、良い言い方をすれば、二分の一で勝てるんじゃないからな」

「それは単純に見た時の確率でしょ！ 私が……この勝負に勝てる確率は、限りなくゼロに近いよ……」

「じゃが、お前さん以外の他の子は、魔法など使わずに勝負するんじゃないって」

「そうだけどつ、そうなんだけど！」

そうなんだ、本来ならば魔法なんて力を使わない。だから私は二つ目の願いを迷っていた。

でもいざ焦ると、やはり魔法の力を使ってしまいそうになる。いや使いたいと、明確に思っているんだ。

私は、私は神宮司さんと——。

「——私は神宮司聖夜さんと、両想いになりたい！」

私は自分の心の中の、最後の一線を越えてしまった。

でも良い方向に考えれば、私は淡い念願だった、神宮司さんとお付き合いできるのかもしれない。

だけど、まさかこれから数ヶ月間、私の生活に何の変化もないだなんて、この時は思いもしませんでした。

聖夜 編3

——時は流れて、およそ四ヶ月。十二月に入り、暑さという感覚は、寒さという感覚に変わっていく。

それに連なつて、町の色合いも大きく変化する。聖なる夜が近づいているのだ。

そういえば俺の友人である、岡島誠也が田中リアさんに、告白をしてから四ヶ月、という事にもなる。すなわち俺が、何のアクションも起こさずに、四ヶ月、という事だ。

正直、進路で忙しかったといえ、真つ当な言い訳は成り立つ。でも俺は、そんな事を言い訳にしたくなかった。

四ヶ月という時間は、俺の中のある感情を、ただ大きく育ててしまっていた。最初は気にしなければ、何ともないぐらいの、小さな感情だった。

だけど、いつの間にかに俺は、魔法にかかったように彼女を好きになっていた。彼女——そう、四ヶ月前に岡島が告白をした女子生徒。田中リアさんだ。

進路に追われながら、不謹慎だけど、俺は田中リアという、一人の女性を目で追っていた。何で俺が彼女に惹かれているのか、それは自分でもわからないのが本音だ。

理由もわからないのに、人を好きになるのは、おかしい事だろうか。俺にはそれすらも、わからないでいる。

ふと空を見上げる。寒空だが、良い天気だ。出かけるには丁度良い。

何よりも考え事は、散歩をしながらやるのが、俺なりのやり方だ。良い事があるかもしれない。

「母さん、ちよつとそこまで出かけてくるよ！」

母親に声をかけ、俺は自宅の玄関を飛び出していく。外は寒い。こつも寒くなると、夏の暑さが恋しくなるのは、俺だけであろうか。

夏の暑さ。夏の大会が、ただ懐かしく思えてくる。もうあと数ヶ月で、高校生活もおしまいだ。そう考えると、急に感慨深くなってしまう。

目尻に滲んだ涙を、適当に指で拭き取る。誰にも見られてはいないはずだ。いきなり泣き出しては、周囲にどう思われるかわかったものではない。

「——おっ、神宮寺じゃん」

よく知った声が、俺を呼ぶ。こいつは岡島だ。

振り向くと、岡島はジャージ姿で、この冬場に汗をかいている。どうやら相当な走り込みをしているようだ。

「やってるな、岡島」

「当たり前だろ。俺はこの世界で、飯を食っていくんだからな！」
岡島はラケットを振るう動作をする。素振りだが、相変わらずの迫力あるスイングだ。

夏の大会以来、練習をしていない俺に、これ程のスイングができるだろうか。いや、無理だろうな。スポーツの世界は、そんなに甘くはない。

何よりも、運動能力において、岡島は俺よりも、一歩二歩は先を行っている。ずっとぼけているが、やはり岡島は凄い。

「神宮寺は何してんの？」

「見ればわからないか？ 散歩だよ、散歩」

「ふうん……散歩、ね」

何か引つかかる言い方をしてくる。

「何だよ？」

「別に、俺は行くわ。体が冷えちゃうからな」

「あ、ああ、気をつけろよ」

岡島は言葉で答えず、後ろ手を振って、そのまま走っていく。

俺の進路は決まっている。それは随分と前に、決めた事なんだ。だけど、頑張る岡島の姿を見ると、俺もプロスポーツの道に進みたかった、と思ってしまう。勿論、甘くはないのは、わかって

いるんだ。

ただ、挑戦はしたかった——。もう遅い事だ。時は過ぎていく。誰が望まなくても。大切なのは、過ぎていく時の中を、どのように活用していくか。

そんな事はわかってる。だから俺は俺のやりたい事を、今手の内に納めたんだ。

だけど気がかりな、もう一つ。それを考えて、俺はこんなところをさまよっている。仮にも告白をしたでしょう。だがその後どうする。俺は彼女に想いを伝えて、一体どうしたいんだ。

ただ伝えるだけなら、いつそのまま無かった事にした方が良さだろう。これならば、彼女に何の迷惑もかからない。そうだ、俺自身が諦めれば良いだけの事なんだ。

——それができないから、俺はこうしているわけで。どうすれば良いのだろう。こうして彼女に対する在り方を考えてるだけで、彼女への想いが募っていく。

「……あつ」

ふと、俺の目の前に、重そうな荷物を沢山持った、お婆ちゃんの姿が見える。しかも歩道橋を、昇ろうとしているようだ。

平地でもふらついているのに、急な階段を行くなんて危ない。そう判断した俺の足は、無意識に走り出していた。

——が、その足は再び無意識に止められた。ある光景が、俺の視界にはつきりと写し出されたからだ。

「お婆ちゃん、重いでしょ？ 荷物持ちますよ」

「おや、すまないねえ」

俺よりも先に、お婆ちゃんを助けに入った人。それは田中リアさなんだ。

しばらく彼女が、お婆ちゃんを助ける姿を眺める。いや、見とれていた。彼女の、田中リアの、その優しい笑顔に、俺の中の時間は、確かに止まっていたんだ。

そして俺の時間が動き出したのは、彼女とお婆ちゃんが、歩道橋

を渡りきった後の事だった。

お婆ちゃんと別れたのを確認すると、俺は一目散に彼女の場所を目指した。

この姿を見て、俺の決心は固まったんだ。

「——田中さん！」

「え、はい？ ……つて、ええ！？」

駄目だ、いざ目の前にすると、物凄い緊張する。

真神理愛 編6

「——田中さん！」

突然、私を呼ぶ声が聞こえてくる。後ろから、透き通るように射抜く声だ。

女の声ではなく、男の声。しばらく聞けなかったけれど、私にはすぐわかる。だってこの声は——。

「——神宮司、さん？」

私の予想は当たっていた。いや、予想よりも確かな確信があったんだ。

振り向くと、案の定というべきか、そこには神宮寺聖夜さんの姿を確認できた。直接的に見れたのは、実に数ヶ月ぶりだ。

無理もない。私と違って、神宮寺さんはいわゆる受験生。忙しい身なのだから、私みたいな小娘を、相手にしている時間はなかっただろう。

ただこれとは別に、私には気がかりな事が、一つだけあったのだ。私は間接的とはいえ、神宮司さんと両想いになりたい、という願いを叶えた。いや、叶えたはずだったのだ。

しかし何の進展もなく、時は流れて、私と神宮司さんは一定の距離を保っている。もしかしたら距離は離れたのかもしれない。

私は確かに願いを叶える為の、行動を取ったはずだ。神宮司さんは、私の事をどう思っているのだろうか。

「田中さんさ、さっきの見てたよ」

「えっ、さっき……と言いますと!？」

考え事をしていた私の頭に、まるで浸透するように入り込んできた、目の前の人の言葉。

突然すぎて、思わず気が動転してしまう。声は裏返ってなかっただろうか。変な口調になってなかっただろうか。

「さっき、お婆さんを助けてただろ？」

「あ、はい。……って見てたんですかつ」

良い事をした、と思うのだけれど、どうしてか顔が赤くなってしまう。

「やだ……恥ずかしいなあ、もう……」

思わず呟き、目を逸らしてしまう。体全体が小さな動作を繰り返してしまう。

でもそんな私とは裏腹に、神宮さんは落ち着き、真っ直ぐな目で私を見ていた。

「何を恥ずかしがる必要があるんだ。田中さんは、とても良い事を、素晴らしい事をしたんだ。もっと胸を張るべきだよ」

そんな言葉に、恥ずかしがっていたわたしの心は、まるで突然に裏切ったかのように、私の中から姿を消していく。

真っ直ぐだ。真っ直ぐすぎるぐらいの、神宮さんの瞳。それに見つめられるだけで、私の中の小さな炎はまた猛っていく。もう遅いかもしれないけど、私の気持ちを直接伝えなくなってくる。

「あ、ごめん。俺一人で熱くなっちゃって……」

「いえっ、凄く嬉しいです！」

これは私の本心。本当に嬉しい事だ。

私のような地味な人間にもできる事として、ひっそりと率先して人助けを行っていたりもする。ボランティア活動もそれなりにこなした。褒められたいからやってるわけではないが、やはり褒められはしなかった。

当たり前だ。その人の活動が見えなければ、褒める人も褒められはしないだろう。

でも私の行動は初めて褒められた。それも大好きな人に。それは私という人間の器にとって、有り余る程の歓喜なんだ。

だから私の瞳からは、町の騒がしさからは比較もできない程に、静寂の涙が流れ落ちていた。

「田中……さん？」

突然の涙を流した私を、目の前の神宮さんは、一体どんな気持ち

ちで見ているのだろうか。変な奴だと思われていないだろうか。

涙を止めようと思うと、どんどん溢れ出てきてしまう。こんなつもりはなかったのに。

結局、私の涙が止まるまで、およそ三分間。神宮寺さんは何も言わずに、ただ黙って私を見ていた。

「——ごめんなさい、私……」

「いや、良いんだ。その涙はきっと、君の心が本当に優しいから流れた。綺麗な涙なんだ、と思う」

私は再び顔を赤らめた。何て真顔で恥ずかしい台詞を、堂々と喋れるのだろう。しかも相変わらず、真っ直ぐな視線を向けたままで、でも威圧感を感じさせない。むしろ暖かくて、優しい視線で心地好く思える。

「田中さん。その……時間があつたらで良いんだけど、俺と……」

俺と。その言葉の先が、凄く長く感じられてしまう。

「俺と、少しでも歩かない？」

——付き合ってくれ。

なんて漫画みたいな、唐突な展開が訪れるわけもなく。でもどこか安心している自分もいる。

それは私が、本当の意味で他人に恋をする事に、少なからず恐怖を抱いているからなのか。

とにもかくにも。神宮寺さんの言葉に、ある意味で安心したのが事実なのだ。

「でも神宮寺さん、お忙しいでしょうに……私なんかと歩いても、良いのですか？」

と言った私に、神宮寺さんは笑顔で、

「勿論！ それに俺が誘って、君が受けてくれる立場だしね。散歩道でフアンタジーは無いけど……エスコートさせていただけますか？」

神宮寺さんは訪ね返してくる。物腰も口調も、非常に穏やかだった。

それとは対称的な、落ち着かない態度で、私は言う。

「は、はいっ、宜しくお願いしてください！」

「あはは、変なの。でも面白いね」

変と言われてしまった。大きなマイナスポイントだ。本当に恥ずかしい。

でも良いか、とも思える。神宮寺さんの笑顔が見れたのだ。

真面目な表情の神宮寺さんは、遠目ながらに沢山見てきたつもりでも笑ってる神宮寺さんは、あまり見た事がなかった。かなり親しい友人にしか、その素敵な表情を見せる事がなかったからだ。

何だか嬉しい。一時的といえども、私という存在は、そこまでの存在になれたのだ。私の単純な頭での考えでだけ——。

「あ、あとさ……」

ちよつと迷ったような感じで、神宮寺さんが言う。今までと違い、どこか迷いのようなものが見える。

ただ、迷い、というには、表現は違うのかもしれない。

「俺の事さ、神宮寺さん、じゃなくて、聖夜で良いよ。普段みんなからも呼び捨てだし、そっちの方が堅苦しくなくて良いし、さ」

頭の中が真っ白になった。神宮寺さんが何を言っているのか、それを理解するのに、ちよつとの時間がかかる。

神宮寺さんいわく、呼び方を神宮寺さんから、聖夜で良いとの事だ。それはつまり——。

「えっ、え、ええ……と」

何かを喋ろうとしたけど、何も出てこない。舌が全く回らなく、余計に恥ずかしい事になる。

「ちよつと落ち着いて。深呼吸でもすると良いよ」

なんて優しい言葉をかけてくれる神宮寺さん。

その言葉に甘えて、私は二、三回程、深呼吸をして気持ちを落ち着かせる。

「わ、私の聞き間違えでなければっ、せ、せせせ、聖夜さん、と呼べと——？」

「別に呼べとは言わないけど。そう呼んでくれた方が、お互いに堅苦しくないかなって」

やや苦笑い気味に、神宮寺さんは言う。私の反応に、きつと困っているのだろう。

落ち着け、自分。

「ではっ、せ、聖……宮寺、さん……」

名前になってない名前を呼ぶ私。

無理だ。いきなり下の名前で呼ぶなんて、こっ恥ずかしい事ができるわけない。

「慣れない？　なら好きに呼んでくれていいよ。俺も何となく……だからね」

「あ、ああ、えと、じゃあ私の事も下の名前で呼んでください！」「えっ……！？」

思い切って言ってみた。名前の呼び方による変化は、お互いの距離感を縮める、一つの要因だと思う。

あ、そうか。神宮寺さん——いや、聖夜さんもそういう考えだったのかな。考えすぎかな。そんな都合よく考えてるわけがない。

「……じゃあ、リア——さん」

「神宮寺さんは先輩なんですから、さん、はいらないです！」

私の中では、結構な勝負を試みたつもり。それが吉と出るのか、凶と出るのか、そんな事までは考えていない。

半ば反射的に出てしまった言葉だからだ。でもどんな結果になっても、不思議と後悔はしないと思う。多分。

「では改めまして——リア」

今日一番の、真っ直ぐな瞳を私に向けてくる。

心臓が高鳴るなんてものじゃない。何が起こっているのかわからない。

カメラのフラッシュのように、頭の中は真っ白に。空白の中の白。「……さて、リア。今度はリアが、俺を聖夜と呼べるように、努力してくれよ？」

「は、はい、努力します……」

この日この瞬間。私達の距離は縮まったのだろうか。それとも私の独りよがりなのか。

ただ確かに何か動いた。そんな気はしたんだ。

聖夜 編4

やった、やったぞ。

俺の心の中は、ある目標を達成した事で、歡喜に満ち溢れていた。くす玉が割れる。

田中リアさんとの距離を、少しでも縮められたと思う。何しろ、いきなり下の名前で呼べるようになったんだ。まだ彼女は呼ぶのに抵抗があるみたいだけど。

だけど俺は、田中リアさんの事を、リアと呼べた。俺も人の事は言えず、どこかに恥ずかしさがあつたが、今は密かな目的達成に、心の中で喜ぼう。

とにかく、俺はリアと、呼べるようになったんだ。

——話を变えて、俺はそれから数分。なんのアテもなく、リアと二人で見慣れた街を歩いている。吹き付ける冬の風が、肌に針のように突き刺さる。

「寒くない？」

そんな当然の事を、俺は今更ながらリアに聞く。女性に対する配慮ならば、もう少し早く聞いておくべきだった。

事実、リアの服装はやや軽装とも思える。考えすぎかもしれないけど、寒さに身を硬くしているようにも見えてしまう。

「大丈夫です」

と、リアは答えたが、今ので確信した。間違いなく寒さに堪えている。

お節介かもしれないと思ったが、俺は着ていたコートを、リアにかけてあげた。

「あ……」

リアはそれに驚いたように、パツと俺の顔を見た。近くで、しかも正面で見ると、やっぱり可愛いと思えた。

確かに地味な部類なのかもしれないが、素朴という、リア独特の

人物像が伺える。それと共に誠実で、優しい印象を受けた。初対面で見て、リアを毛嫌いする人間はいないだろう。

「女の子は……身体を冷やしちゃいけないだろ？ 常に暖かい格好をしてなくちゃ、ね」

どこかで聞きかじった事のある知識を、ただ述べてみた。でも寒さに堪えるリアの姿を、見たくなかったのも事実なわけで。

リアは小さく笑ってくれた。男のエゴかもしれないが、やはり気になる女の子の、喜ぶ顔、安心する顔を見れるのは、どこか心に余裕が生まれてくる。その余裕は暖かさに繋がる。

コートを渡した事によって、身体は寒くなつたが、心は温かくなつた。単純だと思う。

「そつえば——」

リアが口を開く。少し躊躇った感じの一言だ。

「神宮寺……あ、聖夜、さんは、進路とかどうなつたんですか？

小耳にはさんだ話だと、進路が決まって順調だつて聞いたんですけど」

どこからそんな情報が漏れているのか、最近の世の中は怖いな、と思いつつも、知っているのがリアで良かったとも思える。

「ああ、進路は決まつたよ、一応ね。早い時期に、無事に決まつて、良かったと思つているよ」

「おめでとうございます！ さすが聖夜、さんですつ。……それで、失礼ですけど、一体どんな進路を？」

パツと明るくなつたり、急に困りだしたり、俯き加減になつたり、色々忙しい顔だな、と思つた。内心は笑える。

それだけリアの感情が、大きく動き回っているという事だろう。地味な外見とは裏腹に、内面は賑やかなようだ。

——だからこそ、可愛いと思えるんだ。

「……看護、福祉系にね」

「看護、福祉、ですか？」

「そつ、俺は他人の役に立つ仕事をしたいと思つてね。当然の話だ

けど、そういう仕事って何にでも言えると思うんだ。でも、俺の中ではこの仕事にしたいってのが、前々からあってさ」

具体的な事は言えない。自分の中でも、どうしてこれなのかが、あまりにも漠然としすぎているからだ。ただ、何故か確固たる信念のようなものは、俺の中で在り続けている。

俺は、俺自身の信じる道を進んでいるつもりだった。

「素敵じゃないですか、聖夜さんにはいかにも、な優しい仕事ですよ！」

「ははは……素敵な仕事だけど、俺に合ってるかは別問題だよ。でも、ありがとうな」

正直、少しは迷いがあつた気がする。

この道に進んで良かったと思う反面、やっぱり俺はテニスプレイヤーの道を、諦めきれてはいなかった。冷静に考えれば、俺程度の実力で食っていけるとは思えない。でもやっぱり、挑戦したかった。リアの言葉は、そんな俺の僅かな迷いを、払拭してくれた。やっぱり俺は単純だ。一人の人間の言葉に、有り余る程の重みを感じられる。

「リアは、何かやりたい事とか、もう既に決めている進路とか無いの？」

「えっ、私……ですか!？」

かなり驚いている。余程意外な質問だったのだろうか。

でもせっかくリアとの距離を、縮められたんだ。この機会に縮められるだけ、縮めていきたいと思う。

「私は……まだ、決まってない、っていうか」

「決まってない? 特にこれってものはないの?」

「はい、お恥ずかしい話ですけど……。やりたいと思う事もないですし、自分にはこういう仕事が、適しているのかもわからないです」それがリアの答えだ。別に責めるつもりはない。むしろ当然の答えだろう。

だからなのは、この時にはわからなかったけど、俺は意識せず

にリアに対して、言葉を走らせていた。

「リアも、看護とかの仕事、目指してみない？」

言って失敗したと思った。いや、失敗という程でもないのだけど。何だかんだ言っても、彼女には彼女のやりたい事があるはずだ。

そこに俺の価値観は、持つてくるべきではない。

でも、さっきのリアを見て、適している仕事は、そんな仕事なのではないかなと思った。人を助けるというのは、思ってみる事よりも難しい。

「看護、かぁ……。興味はありますけど、私にはどうでしょう。あまり人の役に立つとかって、考えた事はないかも」

「考えてやる必要はないと思うよ。自分がそうしたいって思えたなら、それで良いと俺は考えてる。案外そんなもんなんだよ、きっとさ」

話している内に、自分がやや強引にでも、リアを引っ張りたいと考えている事に気がつく。俺は、リアと同じ道を歩きたいと、思っているのだろうか。

それこそ彼女の意思を、尊重しなければいけない。俺はあくまでも、考えていたり、思ったりするだけだ。

「……でも、そういう仕事って良いかもしれない。誰かの役に立つ、か」

「きつとやり甲斐のある事だし、リアならきつとやれるさ！」

思ったよりも好印象なのが、何よりも嬉しい。遠くから見ていたリアよりも、いざこうして話してみるリアの方が、引き込まれていく何かがある。

どうやら俺は、完全にリアにぞっこんらしい。でも恥ずかしさは無かった。

「やれます、かね……？ 本気にしちゃいますよ」

「それは本人次第。でも俺は、リアに勧めたい」

リアは少し俯き、無言で考えているようだった。話がトントン拍子で進み、頭の中で整理がついていないのだろう。

考える時間は必要だ。その決断は、自分の人生を左右するものなのだから。人に言われて決めるものではない。最終的に、自分自身の確固たる意志があるのならば、良いのだけれど。

そんな心配を他所に、リアは小さなガッツポーズをとり、口を開いた。

「よしっ、私、決めました！ 看護師、目指してみます！」

正直、啞然とした。この子には……リアには、よく考える、というものは無いのだろうか。あるいは考えた末にこれなのか。

いや、後者だからこそ、本人の口から出たのだろう。こんな言葉が。俺には豆鉄砲に撃たれたような、軽い衝撃があった。

でも、嬉しかった。嬉しかったから、つい言ってしまったんだ。

「——じゃあ、リア！ 追ってこいよっ、俺、待ってるから……お前が追いつくまで、俺は待ってるから！」

理性よりも感情の方が強かった。ただ噴火寸前の火山のように、抑えられない衝動は待ちきれなく、ただとめどなく流れ出る。

気持ちが良い。何でこんなにも、気持ちが良いのだろう。カラオケで大声を出して、歌うよりも清々しく晴れやかだ。

そんな気持ちの俺とは違い、今度はリアが豆鉄砲をくらったように呆然として、その平均的だけど可愛い顔を、仄かなリング色に染めている。どこか色っぽさを感じられる。

まずい……可愛い。俺まで赤くなってしまうそうだ。いや、もうなっているかもしれない。

恥ずかしさと、他人にくすぐらわれているような、むず痒さを覚える。でも悪くない。俺、青春してる。

「聖夜、さん……。私、頑張りますからっ、突然すぎる考えかもしれないけど……聖夜、さんが、褒めてくれた道だから、精一杯、やってみます」

「リア……」

リアは、こんな表情をするのか、と思った。見えない気迫に、俺がたじろぎそうになる。

もしかしたら——これは俺の推測だけど、リアは元々、この道に進みたいという願望があったのかもしれない。それは本人に気付かないぐらいの、微弱な感情だったのかもしれない。

勿論、これは俺の推測。事實は本人の胸の中であるわけで。

それよりも俺には俺の戦いがある。リアがこの道に進むという事は、仲間であり、ライバルという事だ。まさか、田中リアという女性と、こういう状態になれるとは、数ヶ月前の俺には想像もできなかった。

——その後、数分程だけ二人で話して、俺達は別れた。緊張していた。

冬の寒さにさらされていながら、身体中に汗がじつとりと滲む。当然の緊張感だろう。好きな子との、関係の進展が早すぎだ。女性経験豊かな方ではない俺にとっては、この上ない経験だったのは言うまでもない。

大きく深呼吸をする。今ならば自分よりも、はるかに体格の大きなゾウよりも、多くの酸素を肺に取り込めそうだ。……そんな事をしたら、俺の肺は空気を入れすぎた風船のようになるだろう。

——とりあえず、落ち着こう。今は卒業までの僅かな時間を、有意義に使ってこう。

そして、およそ二ヶ月後。俺は三年間親しんだ学校を、卒業する事になる。

——卒業式。それは別れの日。更なる成長を促される。

残念ながら、暖かな日にはならなかった。まだ肌寒さを感じられる冷たい風が、その場にいる人達の肌を撫でていく。しかし、そんな寒さとは裏腹に、彼等の心は暖かいのだろう。そう信じたい。

聖夜さんと色々な話をした。あの日から、約二ヶ月とちよつとぐらいだと思う。もしかしたら、三ヶ月、かも。

三年生である聖夜さんは、これで卒業となり、看護学校の方へと進学する。これから学校で、もっと専門的な事を習い、実践経験を積み重ね、素晴らしい看護師を目指そうとしている。

一つの事に、夢中になれるというのは、本当に素晴らしい事なのだ。それが大なり小なり。夢中な人は輝いている、眩しいぐらいの輝きを放てる、というものが才能のはずだ。

私は知っている。ほんの数ヶ月しか見ていなかったけれど、聖夜さんは誰よりも輝いていた。誰よりも努力して、些細な事でさえも見逃さずに集中していた。

私も、そんな聖夜さんを見て、少しは輝けているだろうか。

「——リア！」

よく聞き慣れた声。本当の意味で、聞き慣れたのはつい最近の事のはず。

声の主は聖夜さん。私達は、最初はギクシャクしながらも、いつの間にかに普通に話せるようになっていた。今思えば、懂れていただけだった、あの夏休みの気持ちが懐かしい。

「聖夜さん、ご卒業おめでとうございます！」

「やめるよ、かしこまってさ。そんなに、よそよそしい仲でもないだろ？」

聖夜さんは、優しく、しかしじやれたような笑みを浮かべて言っている。

こんな笑い話ができる関係になったと思うと、どこか身体中からくすぐったいような感覚が襲ってくる。正直に言って、心地好さのようなものを感じられる。

きつと外から見れば、余程だらしない顔をしているのだと思う。でも、どうにも止められないのだ。

「しかし——三年間、色々な事があつたな……」

しみじみと聖夜さんが言う。誰に共有されるものでもなく、ただ一人に一つ、聖夜さんだけの物語があつたはずだ。

自分に満足できたのか、あるいはできなかったのかは、大した問題ではない。それは確かな経験という名の、物語なのだから。

全ての経験は、今の自分を作っている。

「お疲れ様でした」

「ありがとう。でも、疲れてもいられないよ。次の目標が決まっているんだからね」

聖夜さんの目は、常に上を見ている。正確には未来を見据えているのかもしれない。

誰にも曲げられない、確固たる信念を持ち、踏み外す事のない、明るい未来という道を歩んでいる。私もこうになりたい。

好き、とか、憧れている、ではなく、尊敬している。一人の人間として、私は聖夜さんを尊敬しているのだ。多くの交流を通じて、私の気持ちは確かに強くなっている。

「おい、神宮寺。打ち上げに行こうぜつ、俺達の卒業祝いだよ！」

「え、いや、俺は……」

聖夜さんの友達らしい人が、聖夜さんを誘いに来る。既に気分は出来上がっているのか、やけにテンションが高い。

卒業式は極端に、三つのパターンに分かれると思う。一つは、これまでの道程を思い出して、泣きじゃくってしまうパターン。少ないように見えて、意外と多いもの。二つ目は、異様にテンションが高くなるパターン。よくニュースとかでも話題になるけど、こういう祝いの席で、嬉しくなりすぎてしまい、ハイになってしまう。こ

こまでは良いのだけれど、問題はハイになりすぎて他者に迷惑をかけてしまう事例だ。三つ目は、前者二つに当てはまらない「いつもと変わらない」というべきかな、と考えてる。

自分がどれに該当するのか、それはその時になってみないとわからないけど、多分三つ目だと思う。事実、中学卒業の時が、三つ目と同じ状態だったから。

「行ってきたください、聖夜さん！」

「でも……」

「高校卒業の日に、友達と過ごすというのは、一生に一度しかないんです。今行かないと、後で後悔しますよ」

我ながら饒舌だったと思う。意外に舌が回って、すらすらと言葉が出てくる。

その私の回る舌のおかげなのか、聖夜さんは気が楽になったようで、表情が少しだけ軽くなる。

「わかった、行くよ」

「そうこなくっちゃな。じゃあ、時間と場所は……」

待ち合わせ場所を聞いている聖夜さんの顔は、完全に明るくなっていた。きっと男友達と騒いでいる方が、やっぱり楽しいんだろうなって。

待つ事、一、二分。たったこれだけの時間だったけど、私には長く感じられた。十分ぐらいは待たされたんじゃないかな、と思えるぐらい。

「ごめん、リア。後でかならずメールするからさ」

「いえいえ、楽しんでてください、聖夜さん！」

聖夜さんは、もう一度だけ「ごめん」と謝り、さっきの友達と歩いていってしまった。

一人残された私。周りには大勢の人がいるのに、何故かこの場所には、私一人しかないのではないかと、錯覚させられてしまう。酷い虚空感だ。

「楽しんでてください、聖夜さん……。付き合ってもいないのに、

こんな気持ちになる私は、馬鹿だよな」

隣にいれば、聞こえそうなくらいの、溜め息を一つ。胸に嫌な感じが走る。痛いような、むず痒いような、何ともいえない感覚。

——帰ろう。帰って勉強しよう。

友達に会う気分でもないし、出歩き続ける気分でもない。一人とぼとぼ歩く、家への通い慣れた道。聖夜さんに合わせられるように、自転車を使わないで、歩いて学校まで来ていた。

家に帰って、机に向かう。机の上に広げたのは、聖夜さんに貸してもらえた、看護関係の参考書。何しろ一からのスタートで、私は猛特訓しなくちゃいけない。残りの時間は、一年も無い。

今までの自分には、想像もできなかった。それぐらいの集中力で勉強していた。明るかった空が、いつの間にかに墨汁のように、黒く変わっていた。何時間こうしていたのかは、全くわからない。

そういえば昼食も食べていない。気付けば体が鉛のように重く、宙を浮かんでいるように、ふわふわとした感覚に襲われている。

ふと携帯が目に入り、メールの確認を試みる。結果はメール着信無し。誰からもきていないのは、寂しすぎる気もする。

聖夜さん、きっと楽しんでるんだ。私が邪魔しちゃいけない。

でも……一番寂しさを感じるのは、聖夜さんから何もきていない事。

「……お腹空いた」

もう時間的には晩御飯。ママに言って、何か作ってもらおう。それにお風呂も済ませないと。

聖夜さんからのメールが来たのは、それらが終わって少し経ってからの事だった。

『遅くなってごめん、リア。ちょっと色々あってさ……。今日、卒業式が終わったら、リアと一緒に勉強会するって約束、守れなかった。良かったら次の日曜日とか、時間を空けられない？俺さ、リアといえるのが楽しいから……』

聖夜 編5

「——じゃあ今から、大告白大会を始めまーす！ くじを引いて、当たりを引いた人は、自分の好きな人に告白するんだっ」

卒業式の打ち上げに来てみれば、何とも盛り上がり過ぎてしまっていて、ややこしい事になっている。

しかも告白大会を楽しんでいるのは、少数の人間だけ。当然だろうな。誰だって遊び半分で、好きな人に告白なんてしたくないだろう。

俺のクラスは三十五人。そのうち告白の当たり、もといハズレくじを引いてしまうのは、十人だ。こういう時の確率は、かなり高めと見ておくべきだ。現在、五人を消化しているが、告白した結果、結ばれたカップルはゼロだ。あと五人、俺に当たらない事を、ただひたすらに祈る。携帯を見る。これといった着信もなければ、メールも来ていない。リアにメールしておこうと考えて、小さなボタンを小気味よく、カタカタと鳴らしていく。リア、今頃は何やっているのかな。

「——私っ、神宮寺君の事が好きなんだ！」

告白するたびに沸き上がる歓声。他人事として見れば面白いけど、俺はあまり好きじゃない。

それにしても歓声がうるさくて、メールの文章が考えられない。外にでも移動しようか、そう思っただけで立ち上がると、歓声はより一層大きなものになった。

「神宮寺、神宮寺、神宮寺！」

「……えっ、何？」

何で俺の名前を連呼しているのか、それを理解するのに時間がかかった。どうやら俺は、クラスの女子に告白されたらしい。

「……って、ええ!？」

携帯見てる間に、物凄い進展だ。告白した本人も、気持ちはすっ

かりマジで、歓声を送ってるクラスメート達は、すっかり他人事でこの余興を楽しんでいる。

相手は倉田綾。クラスの中では、かなり上位に位置する人気女子だ。勉強もそこそこなし、運動が得意な活発な子だ。告白するのに、かなりの恥ずかしさを我慢しているんだろう。赤くなつた頬が、彼女に魅惑な色気を与えている。気を抜けば、彼女の魅力にとりつかれてしまうだろう。

「私……神宮寺君の事が好き。良かったら、私とお付き合いしてくれませんか？」

倉田さん程の女子に、告白をされてノーと答える男子はいない。それに俺だって、彼女に憧れていた時もあった。でも――。

「ごめん。凄い嬉しいよ、でも……でもさ、俺、好きな人がいるんだ。だから、君の気持ちは受け取れないんだ」

周りの温度の割に、俺と倉田さんの温度は冷めていた。周りからすれば、何を本気で回答している神宮寺、といったところか。

でも本気で想いを伝えてきてくれた彼女に、失礼のないようにするには、俺自身も本気で断るべきだと思つたんだ。

「そつ……か。そつか、好きな子がいるんだ。そつかそつか……なんだ私の一人負けか、そつか！」

愛想笑いを浮かべる倉田さん。そんな愛想笑いにつられて、さらに歓声を高めていくクラスメート。

泣いている。そんな事を言えるはずもなく、気にかける事さえも今の彼女を傷つけてしまう。周りの盛り上がりとは裏腹に、一人笑顔でトイレに駆け込んでいく倉田さん。

「くそつ……俺も、トイレに行きたくなつちまつたよ！」

携帯をしまい、静かにトイレに移動する。決して倉田さんを心配しての事じゃない。本当にトイレに行きたいんだ。

そしてトイレに入って用を足す。ふっと息を吐き出して、嫌な感じを吹き飛ばそうとする。人の真剣な気持ちを、無下に扱ってしまった。気持ちの良いものじゃない。

よく手を洗う。どんな感じでも良いから、少しでも気持ち良くならなかった。そしてトイレから出ると、丁度よく倉田さんも、トイレから出てきた。目が赤い、やっぱり泣いていたんだろう。

「神宮寺、君……」

「倉田さん……」

「気まずい。気まずすぎる。どうすれば良いのか、全くわからないままに、無言で立ち続けている。彼女の表情を伺おうとするが、俯いていてよくわからない。」

「あの、倉たさ……」

「——あのっ！ 神宮寺君の好きな子って、どんな人なの？」

俺の言葉が入らないように、倉田さんは打ち消し気味に言葉を走らせる。

質問内容は、俺の好きな人、だ。

「せめて聞かせてほしいな。私が好きになった貴方が、一体どんな人を好きになったのか。……お願い、聞けば諦めるから……」

今にも泣いてしまいそうな、倉田さんの声。いや、もう泣いているのかもしれない。

どうするべきだろう。教えるべきなのだろうか、俺の好きな人の事を。倉田さんは諦めると言っているけど、きっぱりと諦めきれものだろうか。——そんなはずはないじゃないか。きっぱりと諦めきれぬ奴なんて、いるわけがない。どんな人でも、時間をかけてそれを克服していくはずだ。

彼女は、倉田さんは、そんな苦しみと戦おうと、こんな事を言っているのか。それならやっぱり、俺にできる事は、正々堂々と本当の事を言っただけの事なんじゃないか。

「……俺、俺は、俺の好きな人は……」

やばいぐらいに心臓がバクバクいつている。心音が自分でわかるぐらいだ。顔が熱い、いや体全体が熱い。

頭の中で整理している言葉が、片言になっているのがわかる。冷静さを失っているんだ。冷静になれ、冷静になれ、と心の中でどれ

だけ思っけていても、それとは裏腹に頭の中はパニックになっけていく。馬鹿。倉田さんは、こんなパニックな心と戦いながら、こんな俺に告白をしてきてくれたんだ。俺もこれを克服して、彼女の望む言葉を言わないでどうする。

「俺……二年の、田中リアが、好きなんだっ！」

言った、言っけてしまった。別に何も悪い事はないはずなのに、何故か罪悪感を持っけてしまう。

この言葉は、倉田さんに対する答えであると同時に、俺自身に対する答えでもあった。俺はリアが好きだ。倉田さんに浮気してしまうのは、男としてのプライドが許さない。それに浮気なんてできない。

俺の、リアへの気持ちは、この程度の事で揺らぐはずもないのだから。

「二年……そっか、下級生か。………神宮寺君、大切にしてあげないと、私が許さないんだからね」

「言われなくても、わかってるよ。それに、倉田さんの言葉、しっかりと覚えておくから」

俺にしては格好のいい台詞を、言えたつもりだった。倉田さんも満足してくれたのか、ようやく少しだけの笑顔を見せてくれて、足早に俺の前から移動していく。

儂くも力強い笑顔だった。きつと今の俺に何もなかったら、立場は逆転していただろう。俺が倉田さんに、告白していたかもしれない。

ありがとう、倉田さん。口に出しては言えないけど、せめて心の中だけでは、許してもらいたい。

——それから約二時間後、打ち上げ終了。大学生ならば、この後に二次会とかするのだろうけど、まだ俺達は善良な高校生。早めの解散となる。

勿論、アルコールは飲んでいない、はず。少なからず俺は飲んでいない。

「お疲れっ、神宮寺！」

「あ、ああ、岡島か」

「何だよ、拍子抜けしてるな。今日は告白もされて、男ならウハウハな日だったろうが！」

相変わらずの岡島。こいつはどんな時でも、いつも通りだな。

周りのみんなは、卒業式を向かえて、それぞれの道を歩んでいく事に、しみりムードだったのにな。そりゃ中には、県外へと出ていってしまう奴だっているんだ。つまり当分は、あるいは一生会わなくなる奴だっているんだ。寂しくないわけがない。

「なあ、神宮寺よ。——ありがとうな、三年間」

「えっ、はあっ!？」

意外な人物からの、意外な言葉。失礼。

だが意外なのは、正しい反応だったと思われる。

「お前みたいな良い奴に会えて、三年間付き合えた。俺が馬鹿できたのは、お前のおかげだぜ。マジで、ありがとうな」

気持ちの良い奴だ。だからこそ――。

「俺も、ありがとう。お前みたいな馬鹿がいたから、俺も毎日が楽しかった」

「楽しかった、じゃねえよ、これからも楽しいんだ！俺達、別々の道に歩むんだけど、俺達の友情みたいなもんは、同じ道を歩み続けるんだ。三年間のありがとうと、これから先のよろしく、だぜ」

馬鹿と何とかは、紙一重、ってよく言うけど、こいつは実は後者なのかもしれない。ある意味での、ね。

気付かぬ内に、無意識で握手をしていた。岡島の手は、汗をかいていて気持ち悪かったけど、甘んじて受けよう。今の気分は、それ以上に気持ち良かったから。

「じゃあな！お互いに、未来に頑張ろうぜ！」

「ああっ、当たり前だ」

満面の笑みを見せて、岡島は夜の闇へと走っていった。岡島がいなくなつて、一人になった瞬間、俺は何故か涙が流れていた。

いや、泣いてもいられない。次は挑戦だ。自分の将来を懸けた、大事な挑戦なんだ。頑張ろう、きっと再会するだろうクラスメートに、胸を張って会えるように。

——そういえば、すっかりと忘れてしまっていた。俺はリアに、メールをしようとしていたんだ。

タイミング良く、告白大会なんてものに当たってしまった事もあり、すっかりしていた。おまけに倉田さんの事もある。決してやましい気持ちは無いのだけれど、後ろめたい気になるのは何故だろう。

携帯を見ると、メール画面のまま止まっている。まだ一字も打っていない。

その後、文章はすんなりと完成した。リアは怒っているだろうか。

嫌な方面での、ドキドキ感を味わいながら、俺は送信ボタンを押す。メールが送られていく画面を見ながら、「ふう……」と一息。楽しかったけど、色々な意味で疲れた日だった。

正直、リアからの返信がきても、返さないつもりだ。打ち上げが終わった事による安堵感により、俺の中では猛烈な睡魔が、襲ってきていたのだ。返事ができる程、頭が回らないのが本音だ。

だけど結局その日、リアからの返信はなかった。

「——しっかし、あのリアが、よく勉学に打ち込んでるものね」

「えっ……？」

そんな事を言ってきたのは、友人の香苗だ。感心したような口振りとは裏腹に、顔は無表情だった。

今日は金曜日。聖夜さんとの約束日まで、残り二日になる。あの卒業式の日、正直なところ、私は不機嫌だった。卒業式が終わった後、勉学会をする、という約束を、聖夜さんに守ってもらえなかったから。

勿論、冷静になった今では、私が子供だった事はわかってる。最後のクラスメート達との、笑える瞬間を、私が奪い取る権利はない私との勉強会なんて、やろうと思えばいつだってできるのだから。クラスメート達との思い出は、あの日あの一瞬にしか掴めない。

決して悪くはない聖夜さんから、その日の夜に連絡があつて、勉強会は次の日曜日——つまり二日後に約束された。心の底から嬉しくて、生きている事に素晴らしいくらいの、充実感が得られているああ、これがリア充とでも言うのかな。

「おい、意識がワープしてるぞ。この幸福者め。——リアと神宮寺先輩ってさ、もう付き合ってるんでしょ？」

「ブバツ……！ い、いきなり何を言い出すのよ！？」

「何って、付き合ってるの？」

「付き合ってる……ないよ」

「ふうん……。噂だと二人はとくに付き合ってるって、聞いてるんだけどね。それに仲良く勉強したり、一緒に帰ったりしてるみたいじゃないの、羨ましいぞ！」

「そ、そんなんじゃない……ないって……」

本当にそんなじゃない。私と聖夜さんとの距離は、確かに縮まったのかもしれない。でも、最後の一線というか、そのところが

わからない。どんなに周りから見ても、仲良くしているようでも、私達はいわゆる、彼氏彼女の関係ではないのだから。

聖夜さんは、私の事をどう思っているのだろう。私は聖夜さんの事が好き。もしも聖夜さんが、例えば告白してきてくれたのなら、迷わずに喜んで、私は「はい」と答える。でも私から告白する勇氣は、結局は無いわけで。やっぱり告白して、もしも駄目だったらという感情が、どうしても強い。

でも仮にも——私が告白をして、駄目だと言われたのなら、今の関係はどうなってしまうんだろう。決まっている、もう終わりなはずだ。この仄かな幸せな日々も。

「……ま、悔いは残さないようにね」

「ありがとう、香苗」

そのまま手を振って別れる。香苗はサバサバしたところがあるから、友達と別れる時も、結構あっさりしている。

さて、勉強も頑張ろう。ちなみに今は放課後の図書室。私と同じように、勉強に励んでいる人も、ちらほらといるけど、どこことなく寂しく感じる。

夕焼けの光が、窓から入り込んできて眩しい。それと共に、帰宅する学生——特に男子の声が響いてくる。今日一日も終わりなんだと、嫌でも思えてくる。刻一刻と過ぎていく時間を、素直に感じる事ができる。

急がなくちゃいけない。しかし確実にこなさなくてはいけない。未来に悔いは残さない。

—— だけど時間は過ぎていき、金曜日の夜、土曜日の朝、昼、そして土曜日の夜。ついに楽しみにしていた日曜日の朝を迎えた。

聖夜さんに会うのは慣れているから、緊張はしないはず。というのは嘘で、緊張から夜はまるで眠れなかった。多分、普通に会うのとは違って、約束して会う、というところに緊張しているのだと思う。

約束の内容は、日曜日の十一時、市内のとある図書館の門の前で待ち合わせ。その後は、休憩と称してお昼ご飯。ある程度の休憩の後、また勉強に戻る。たったこれだけかもしれないけど、私にとつてはアイドルが来る以上に、ビッグイベントなのだ。

「ママ、今日はお昼、外で食べるね」

「そうなの、お金はあるの？」

「あるから大丈夫」

用意を済ませながら、何気ない会話も済ませる。時間の余裕があるとはいえ、やる事はたくさんある。特に身支度とかに、膨大な時間だ。

でも用意の最中、私はしばらく忘れていた事を思い出した。それは随分前に、見た夢の事だ。変なじいさんが出てきて、願いを二つだけ叶える力を、授けてくれる夢。不思議な感覚が、体の奥底から込み上げてくるようだった。

考えてみたら、この夢を見たのは、まだ数ヶ月前の事だったはずなのに、まるで数年は経過したように、記憶が薄れている。そういえば、私は二つの願い、何を叶えたのだろうか。まるで思い出せない何か嫌な予感というか、気持ち悪さのようなものがある。

そんな時に、私の視界に飛び込むように、入ってきたものがある。それは麦わら帽子だ。

「やだ、季節外れなのに、まだしまってたんだ」

去年の夏に被っていた、麦わら帽子だ。それから半年近く経っているのに、まだ出しっぱなしだったみたい。

「あれ、これ……」

そこには名前らしい字が書かれていた。そこにあった字は、『真神理愛』と書かれている。私はこの瞬間、一つの事柄を思い出す。

「そうだ……私の名前だ。私の、本当の名前。どうして忘れてたんだろう……やだ、何か怖い……」

そう、二つの内の一つ目の願いは、私の名前を、真神理愛からリアに変える事だった。じゃあ二つ目の願いは――。

全く思い出せなくなっていた。私は確かに、二つの願いを叶えようとしたはずなのだ。でもそれが何だったのか、まるで思い出せなかった。

そうこうしている内に、時間はそれなりに進んでいる。急ぐ程でもないけど、のんびりしていたら遅刻しちゃう。——心の中に、何か嫌な予感を残しながら、私は家を出ていく。

聖夜 編完（前書き）

この話の冒頭部分では、土曜日なんですが、母親との会話中にいつの間にか、日曜日になっています。ここは暇を見て修正させていただきます。

聖夜 編完

「母さん、明日はちょっと出かけるから、おれの分の昼は用意しないで良いよ」

「えっ……明日、出かけるのかい？」

俺は母さんに、明日の事を伝えておく。明日はリアと一緒に、図書館で勉強会だ。一週間前には、約束を破ってしまった事もあって、今回こそは絶対に叶えるつもりでいる。

しかし母さんは、何故か浮かない顔をしている。そろそろと落ち着きがなく、何かを俺に話したいのか、俺の顔を見ては、迷っているようだった。こんな事は珍しい。母さんは基本的には、俺の予定に口は出さない性分だ。どんな時でも最後には、「気をつけて、いつてらっしゃい」と言ってくれる。だからこそ、この母さんの態度に、何かしらの不安を感じてしまう。

「どうしたのさ、母さん？」

「いや、その、ね。……明日は、出かけるのは止しておいた方が、良いんじゃないかってね」

やっぱりおかしい。今までだって、母さんがこんな事を言う事はない。何か嫌な予感でも、感じているのだろうか。

「明日は……大事なんだ。ずっと前からしていた約束だし、俺にとっても、彼女にとっても、大切な事なんだ」

「……彼女？ お前、ついに彼女ができたのかい！？」

「あ、いや、そうじゃなくて、えっと、まだ……彼女になればいいなって、思ってるだけだから。っじゃなくて、大丈夫だから、母さん。だから、俺は明日行くよ。大切な……約束だからさ」

母さんは、まだ踏ん切りがついていないようだ。明日、俺に何か起きるのだろうか。だけど今は、どんな予感が走ろうとも、リアとの約束を最優先したい。今の俺にとって、言い過ぎなのかもしれないけど、リアは今の人生の中で、最も充実した存在なんだ。

いつかは、こんな関係が終われば良いと思ってる。それは良い意味での話で。リアとは今でこそ、友達以上の付き合いをしている。それは俺の、勝手な独断なのかもしれないけど。でもそれは、いわゆる友達以上恋人未満の関係を、抜けきれていないという事でもある。

俺は、リアとそういう関係になりたいと思ってる。エゴを言うのと、俺はリアと彼女彼女の関係に、なりたいたいと思ってる。でも、やっぱり言えない。今の関係を壊したくないからだ。これは思えば、ずっと前から、壊したくない、と思っていたのかもしれない。過去から何も変わってはいない。俺は目の前の、自分の気持ちから逃げているだけだ。

——それはわかっている。でも言えない。これ以上の関係を願っていても、これ以下の関係には、とてもじゃないがなりたくない。ハッピーエンドがわかっていたら、誰もが告白という術をとっているはずだ。だけど現実には、そう甘くはない。だから俺は、現状維持なんて、つまらない事を行っているのかもしれない。

リアは俺の事を、本当はどう思っているのだろう。今日、思い切った、それとなく聞いてみるべきか。そうだ、直接的に聞くのは抵抗あるだろうから、間接的に遠回しに聞いてみよう。もしもそれで、あわよくば良い回答が得られたのなら、告白、というものも視野に入れてみよう。ちょっとズルい、臆病戦法だけど、俺にできる精一杯の戦略だ。

——緊張感を保ち、あつという間に、約束時間が近付いてくる。どんな感じで聞いてみようか、心の中で入念なりハーサルを行う。そうすれば時間の経過なんて、やっぱりあつという間だ。

「じゃあ、母さん。行ってくるよ」

「うん……いつてらっしゃい」

見送りに来てくれた母さんは、やはり浮かない顔で、俺を送り出してくれる。そんなに嫌な予感がするのだろうか、俺には何も感じ

られない。いつもと変わらぬ日常であり、天気もいたって晴れ。まだ寒いけど、心地良い風が吹いている。

なんだか今日は、全ての事が上手くいきそうな気さえする。ポジティブな感情に、胸のワクワク感が募る。

約束場所は、市内のとある図書館だ。家からはそう遠くない距離で、行き慣れた道でもある。子供の時は、夏休みの宿題の、読書感想文の本を探しに、よく利用してたっけな。思えば子供の頃が、一番楽しかったと思える。全てが輝いていたっけ。

家から図書館までの道中、人はそんなに見かけない。昼時間近という事もあって、みんなスーパーとか、外食店に出向いているのだろう。そういえば、昔から家の近くには、外食店はおるか、コンビニすら無い。振り返ってみると、近所は田舎っぽく見えてしまう。それが静かで、良いのかもしれないけど。田舎だけど、やっぱり故郷って良いもんだな。なんて若者らしからぬ考えにふけてしまふ。

「――危ねえぞ！」

突然、クラクションと共に、トラック運転手のいかつい声が聞こえてくる。辺りを見回すと、大型トラックと、老人が近くに見える。どうやらもう少して、交通事故になりかねなかったみたいだ。喧嘩にはならず、トラックは見た目も乱暴な走行で、その場を離れていく。

あの運転の乱暴さから、危険だったのは、トラックの方だろう。まあ、相手がお年寄りだっただけに、急に飛び出してきた、なんて事もあるかもしれないけど。でも最近、本当に危険な走行をする人間が、増えたように感じられる。

車だけじゃない。バイクや、自転車もだ。それらを利用している人の、マナー不足が目につく。といっても、俺が偉そうな考えを述べていても、何かが変わるわけじゃない。でも一人一人の、マナー意識の重要性は、わかっていふつもりだ。

それに休日の日曜、いるのはお年寄りだけじゃない。学校が休み

の、小さな子供も走り回っている可能性だってある。ふと見ると、言ってる側から、男の子がこちらに向かって走ってくる。

「おいおい、走るなよ、危ないぞ」

俺は男の子に向けて、声をかける。だが男の子は、走る事に夢中で、俺の声は届いていないみたいだった。やれやれ……。

と、呆れるのも束の間、俺の視界には、あるものが捉えられた。それは猛スピードで、接近してくる乗用車だ。子供には気付いていないのか、車は速度を緩める気配はない。男の子も、やはり車の接近に気付かない。

「ま、マジかよ……。おいっ、止まれっ、車が来てるぞ！」

俺はめいっぱいの、声を張り上げて、男の子に知らせる。車にもわかるように、大きく手を振った。

男の子は気が付いたが、自分の置かれている現状に、あまりに一瞬间過ぎる光景に、ただ棒立ちしている。車も気付いたようで、甲高い急ブレーキの音が聞こえる。

「くそっ……！」

力の加減はできなかった。俺は男の子を、車の枠の外へ出るように、突き飛ばす。危険かもしれないけど、車に激突されるよりは、はるかに安全だ、と思いたい。

だけど、その男の子が、どうなったのか、俺にはわからなかった。一つわかってるのは、急ブレーキ音が、途端に俺の耳に入ってこなくなっただけ。

ああ、リア、行かなくちゃ、約束を、守らなくちゃ、楽しみに、してたんだもん、リア？ ごめん。

「どうしたんだろう、遅いな……」

私は図書館の前で、聖夜さんを待っている。遅い、とは言ったものの、実際のところは、待ち合わせ時間から三分程、遅れているだけだ。

でも、聖夜さんに限って、三分の遅れは、かなりのものだと言える。待ち合わせすると、いつも聖夜さんが先にいる。私も時間より、十分早く到着するようにしているけど、聖夜さんはそれよりも早い。三十分前には、既に到着しているんじゃないかと思ってしまう。

だからこそ、たかが三分とはいえ、聖夜さんの遅れは相当なものなんだ。——そしてそれから、一分が経過する。それでも聖夜さんは、まだ来ない。来る気配すらない。

「本当にどうしたんだろう。何だか、凄く心配になってくるな……」
胸にぞわぞわする感覚が、伝わってくる。あまり良い気分ではない。とても嫌な気分だ。

でもこれは、考えすぎというものだろうか。きっと数分後には、ずっと姿を見せてくれて、私を安心させてくれるに違いない。だから遅れてきた聖夜さんに、私から精一杯の、わがまを言っつてやろうと思う。きっと考えているうちに、聖夜さんは現れる。

「おい、向こうで凄い事故だつてよ。車が歩行者を跳ねちゃって、ひかれた奴は重体だつて」

「マジで？ ちょっと見に行こうぜ」

私の前を歩いていた、大学生くらいの男性二人組の、会話を偶然聞いてしまう。とても不謹慎な会話だ。他人の不幸を、ネタにするなんて。

でもそういえば、辺りが急に騒がしくなってきた気がする。その騒がしさが、私の中の、ぞわぞわ感を一層激しくさせる。だから、悪い方向にばかり、目が鋭くなってしまう。

「あの人達が向かった方、……聖夜さんの家がある方だ。まさか……」

嫌な方ばかり、辻褄があってしまふ。いつも待ち合わせ時間よりも、早く到着する聖夜さんが、今になっても姿を見せないのは、事故にあつた人物が、聖夜さんだから？

その考えにたどり着いてしまった瞬間、胸騒ぎは急激に加速します。鼓動も速くなり、呼吸が荒くなりだす。気付けば大量の、汗をかきだしている。頭の中が真っ白で、出てくる言葉が、聖夜さん、だけになってくる。何を考えて、どうしたいのかも、わからなくなってくる。

どうすればいいのだろう。私は待ち続けるべきだろうか。きっと聖夜さんは、現れてくれるはずだ。でも、もしも聖夜さんが、私の前に現れなかったら……。

「聖夜さん……」

まとまらない考えよりも先に、私の二本の足は、走り出していた。どうか無事にいてほしい。遅れた理由は、きっと事故のせいで、道が通れなかったんだ。どんな理由でもいいから、無事にいてほしい。

——私が事故現場に向かう途中、他人の話が耳に入ってくる。

どうやら事故の原因は、車側の前方不注意である事。その道路の法廷速度を、随分とオーバーしていた事。更に前方不注意の原因は、ドライバーが携帯を見ながらの、走行をしていた事、とあるみたい。車というのは、便利かもしれないけど、危険な乗り物。どうしてそういう自覚を持って、運転する事ができないのだろう。普段は気にしない、でも今のこういう事態だからこそ、ルール違反に過剰反応してしまう。

事故にあつたのは、大学生ぐらいと見える男性。これを聞いただけで、私の不安感は加速してしまう。現場に近づく度に、あらわになってくる事故原因に、嫌な予感は、確信へと変わってきてしまう。

他の誰ならば良い、というわけでもないけど、どうか聖夜さんが無事にいる事を、願ってしまう。私の手は、さっきから力強く握られたままだ。

そして事故現場に到着する。かろうじてわかるのは、パトカーと救急車が一台ずつ。更に事故車と見られる、乗用車が一台。パトカーと救急車の、赤い回転灯が、日常を非日常に変えている。

たくさんの人が、この事故現場に集まっている。こういう時ほど、野次馬に苛立ちを覚える瞬間はない。私は群れる野次馬を、必死に掻き分けながら、現場に近付いていく。

視界が開けた。真っ先に見えたのは、泣き叫ぶ男の子の姿だ。事故の瞬間に、近くにいたのか、これ以上ないぐらいに、大泣きをしていた。可哀想に、そんな姿を見ると、胸が痛む。

次に見つけてしまったものに、私は大きなショックを受けた。血だ。真っ赤な血だまりが、私の視界の中に入ってきた。

「うつ……！」

吐き気が込み上げてくる。普通に暮らしていれば、見る事もない程の、あまりに多すぎる血痕。これでは助からない、そんな考えが思わずよぎってしまう。

私は辺りを見回したけど、事故にあった男性を見つける事ができなかった。きっと救急車の中にいるのだろう。応急措置をしながら、身元の確認をしているのだろうか。いずれにしても、もたもたしてたら、救急車は発進しちゃう。

「あ、あのっ」

「はい、何ですか？」

私は近くにいた、救急隊員の人を、強引に捕まえる。普段の私なら、恥ずかしくてできないだろうけど、緊急事態の今だからこそ、大胆な行動にも移れる。

「事故にあった人……もしかしたら、私の知り合いかもしれないんですっ、どうか、会わせていただけませんか？」

「本当ですか？ では、こちらに来ていただいて——」

案外とすんなり行ける。救急隊員に誘導されるまま、私は救急車に乗せられた。中では二人の隊員が、事故にあった男性に、何かをしている。素人の私には、何をしているのかはわからないけど、きっと緊急措置だと思う。

「では、すみませんけど、確認の方をしていただいて」

「あ、はい……」

私の不安感は、一番のピークを向かえていた。もう呼吸をしているのかさえ、わからない。

おそろおそろ覗いたその先には、残酷な現実だけがあつた。血だらけで、無惨な程にボロボロになった、神宮寺聖夜の姿が、そこにあつた。

「……聖夜、さん？」

私は不安感から解放された。解放された先に待っていたものは、ただ空白のみで、そこから先の事は、後々何とも思い出せなかった。

そして、空白はすぐに暗闇に変わる。

真神理愛 編完

良い予感、いつでも当たらないものだなんて、今はどうしてもそんな風に考えてしまう。

聖夜さん……。悪い予感は当たってしまった。心の片隅では、聖夜さんが事故にあった、という予感と戦いながらも、でもきつと別人だと信じ続けていた。ちょっと遅れてきた聖夜さんは、「ごめんね、リア。すぐそこで大きな事故があつてさ、なかなか通れなくて遅くなっちゃったよ」なんて、私に笑顔で言い訳をしてくれる。

そんな些細な願い事。それで私は、ちょっと彼女を気取って、怒ったフリをして、でも本当は嬉しくて。楽しみにしていた約束を、二人で着実に達成していく。それで良かったんだ。本当に些細な、そんな事で良かったんだよ……。

でも、そんな些細な願い事は、叶う事もなく。よく「音を立てて崩れ去る」なんて表現があるけど、私はその音すら聞けなかった。いや、聞かなくて良かったのかも。聞いていたら——私はもう壊れていたかもしれない。

涙すら出てこない。でも心臓は、今でも猛々しく脈打ってる。理性は涙を流したがっているのに、本能が現実を拒否してる。あるいは、その逆なのか。何にしても、私は今、非日常の中にいるのは、間違いないと思う。

聖夜さんは、緊急で運ばれてきて、今は集中治療室にいる。お医者さんの話では、かなり絶望的な状態らしい。聞かされた時点では内臓の状態は言われなかったけど、外部の怪我が酷く、出血量が多まりにも多く、そして出血していた時間が長かったのだ。出血性ショック死に、一歩近かったとか。仮にも峠を越せても、何らかの後遺症がある事を、覚悟しておくように伝えられている。

私は病院に着いた時点で、聖夜さんの自宅に連絡した。電話に出てくれたのは、母親の方だった。それから数分後、聖夜さんのお母

さんに、お医者さんに説明された事を伝え、今に至る。

聖夜さんのお母さんは、治療室近くにいるみたいだけど、私は病院内の、治療室からは離れた所にいる。治療室の近くにいると、気が狂いそうになってくるから。

外を見ると、気持ちが良いぐらいに晴れている。そんな外の明るさとは違い、何故か病院内は、暗く感じられる。おまけに身体中の元気が、どんどん吸いとられているような、そんな感覚に陥れられる。

途端、睡魔が襲ってくる。わずか短時間だったけど、色々あったから、精神的にも肉体的にも疲れたのだと思う。でも今は、眠っている場合じゃないのに。そんな気持ちとは裏腹に、私の精神と肉体は、急速に暗闇へと落ちていった。

——暗闇の中では、久しぶりに見る顔が待っていた。いや、久しぶりどころか、私はその人を忘れていた。

「神様、でしたっけ？」

「いかにも。よく覚えておるな、大体の人間はワシの事を、徐々に忘れていくようにしとるんじゃが」

見るからに胡散臭いお爺さん。今見ても胡散臭いけど、持っている力は本物だった。

私に二つだけ、願いを叶える力を授けてくれた人、もとい神様。

と、その時、私の頭に、ある考えがひらめいた。自分でも、都合の良いすぎる考えだって事は、百も承知している。

「お爺さん、一つだけ願いを叶えてください、お願いします！」

「ふむ……。ワシは特別視はせん。気まぐれて願いを叶える力を授けはしたが、お前さんの願いを叶えてやる義理はない」

「お願いしますっ、せめて……。せめて、お話だけでも」

私は土下座して頼み込んだ。私程度の土下座に、何の価値もない事は、わかっているけど、何かをしたかった。聖夜さんの為に。

「話ぐらいなら良かるう。その内容次第によっては、最後に一つだ

け、願いを叶えてやっても良い。——但し、今からお前さんが言う事に、一切の嘘は許さん。もしも、嘘をついたのなら、罰を与えるぞ。良いな？」

私はそれに頷いた。聖夜さんの為なら、仮にも罰を受けても構わない。

今までに集められた情報を、嘘偽りなく、お爺さんに告白する。

警察の人から、それなりの説明をもらったから、間違いはないはず。でも子供を助けて、自分がこんな状態になるなんて、その瞬間まで、聖夜さんは聖夜さんだったんだ。今回の悲しい出来事で、私が唯一嬉しかった事。

「なるほどのう。ここ最近の、欲深き人間にしては、良き行動をした若者じゃて。自分の命を盾にし、少年を救うなど、思っけていてもなかなかできん事じゃわい。お前さんは、嘘もついておらんようじやしの」

「……じゃあっ！」

「うむ、願いを一つ、叶えてやるう」

「あ、ありがとうございます！」

悲しみの底から、歓喜が沸き上がってくるようだった。悲しみの涙ではなく、嬉しさの涙が、滲み出てくる。

「じゃがの、願いを一つ叶えるとは言ったがの。この若者の状態は、既に死に近い状態にある。つまり死人に近いという事じゃ。死人を甦らせるなど、神の間でも御法度の技じゃし、並大抵の魔法力でやれるものではないわい」

「……願いを、一つ叶えるぐらいの、魔法力では足りないという事ですか？」

「そういう事じゃの。お前さん、はじめて会った時よりも、頭の回転が早くなったの」

「じゃあっ、例えばの話ですけど、どれぐらいの魔法力があれば、聖夜さんを回復させられるぐらいの、力になるんですか!？」

私の感情は昂っていた。あと少しで手が届きそうだったのに、ま

た振り出しに戻ったようで。絶望的な振り出しに。

お爺さんは、私に向かって、人差し指と中指を立ててみせた。つまりは二を表している。

「あと二つ。願いを叶える魔法力が、あと二つ分あれば、死傷の若者を、回復する魔法力に足る。じゃが、仮にも三つ分の魔法力があってもじゃ、成功する可能性は五分五分じゃがの」

現在ある魔法力は一つ。聖夜さんを蘇生させるだけの、魔法力は三つ。根本的に魔法力が二つ足りていない。仮にも三つの魔法力があっても、成功の確率は五分。

身体中が絶望感に包まれていく。気を抜けば、膝から一気に崩れてしまいそうだ。もう手立ては、何もないのかな。

（――リア）

全てを諦めかけた瞬間、どこからか聖夜さんの声が聞こえた。気のせいだったのかもしれない。でも聖夜さんが、私を呼んでくれる声が、脳裏に走ったんだ。

そこで私は、ハツとなった。できるかはわからないけど、一つだけ方法を見つけた。

「お爺さん、一つだけ……確認したい事があるんですけど」

「何じゃ、言うてみい」

「お爺さんが私にくれた、願いを叶える魔法力……それを、聖夜さんを蘇生させる為の、魔法力に回す事はできますか？」

「お前さん、本当に頭が良くなったのう。結果としては、可能じゃ。しかし、一度願いを叶えてしまった魔法力の塊じゃ。既に元の力は失われかけておるじゃろうな。お前さんに与えた、二つの魔法力を足しても、一つ分の足しにしかならんじゃろう。それに、一度魔法力を手放せば、叶えた願いは白紙になる。つまり叶えた願いは、無かった事になる。……それでも良いんじゃない？」

叶えた願い。一つは私の名前。真神理愛という名前が嫌で、私は名前を変えた。二つ目は聖夜さんと両想いになりたい、というもの。名前なんていい。元に戻ったって構わない。今にして思えば、そ

なんくだらない事に、願いを使った私が馬鹿だったんだ。でも、二つ目の願いは……。白紙に戻るって事は、聖夜さんとの関係も、一からの状態に戻るって事になる。あの夏の日に――。

でも、今のまま聖夜さんがいなくなってしまうのなら、あの夏の日に戻った方が良い。聖夜さんを失いたくない。もう聖夜さんと、呼べない関係になってもいい。どんなに低い確率でも、微かな可能性があるのなら、私は小さな光を信じたい。

「……お願いしますっ」

「ふむ、よし……何とかやってみよう。ほっほっほ、人間の為に、ここまでやってやろうと思えたのは、随分と久しい事じゃ――」

――それが、私がお爺さんを見た最後になった。

白色の世界が終わり、目が覚めると、あれ程晴れていた空は、すっかり夜に変わっていた。誰かがかけてくれたのか、私の膝元には毛布が一枚あった。

行ってみよう。聖夜さんが戦っている場所へ。私ももう逃げない。どんな結末が待っていても、私はこの物語の終幕を受け入れる。

治療室に近付くと、聖夜さんのお母さんが、私に声をかけてきた。「真神理愛ちゃん、ありがとうね。疲れているだろうに、息子の為にわざわざ……」

「いいえ、それで聖夜――いえ、神宮寺聖夜さんは、どうでしょうか？」

聖夜さんのお母さんは、黙って静かに、首を横に振った。

「手術開始から約八時間。良くもなければ、悪くもならない。微妙な膠着状態を保っているらしいわ。でも油断をすれば、どう転ぶかわからないからっ」

「そう、ですか……」

通常、願いを叶える魔法力が三つで、五分の確率。私の使い古しの魔法力で、補えたのはたったの一つ。お爺さんから、新たに貰えた魔法力が一つ。合計二つ。きつと確率は、相当低いんだろうな。

「あっ……！」

と、その時、聖夜さんのお母さんが、声をあげる。つられて私は、お母さんの視線を追うと、そこには『手術中』の看板が。そして看板の光は消えていた。

つまり——手術は終了した。

中からは移動ベッドに寝かされた聖夜さんと、数人のお医者さん。それと担当医の方が、私達の方に向かってくる。

「——おめでとうございます。峠は無事に越えました」

「そ、それじゃあ……？」

「はい、手術は無事に成功しました。もう大丈夫です」

時が止まった、とでも言うのだろうか。もうその瞬間の事は、覚えていようで覚えていない。嬉しかったのだろうけど、嬉しかったのかさえもわからない。そんな、不思議な感覚だけは、今でも鮮明に覚えています。

聖夜さんは、その後の入院生活で、ぐんぐん傷も治り、体力も戻っていき、事故なんて最初から無かったかのように、すっかり元気を取り戻していきました。

その後の担当医の話では、生きていたのは奇跡だそう。ほぼ助かる見込みは無かったそうですが、とある瞬間から急に息を吹き返したとか。科学という魔法と、神様の魔法が、成功という名の、奇跡を起こしてくれたんだって。都合が良いけど、そう考えるようにしています。

——それから数ヶ月が経った、十二月二十四日。

「悪いね、真神理愛！ 一番忙しい時期に、呼び出したりしちゃって」

「あ、ううん、大丈夫。それで、話って何？」

やっぱり私の願い事は、白紙に戻ったようで、みんなからは元の真神理愛の名前で、呼ばれています。少しだけ、大人になれたのかな。今では少し気に入っている、この名前。

でも、一つだけ不可解な点があった。願い事は全て白紙に戻るなら、私と聖夜さんの関係も、白紙に戻るはずだ。なのに、あの日から私達は、何一つ変わる事なく、今を大切に過ごしている。それは良いのだけれど、何だか引つ掛かる。

「あ、雪が降ってきたな」

「本当だ、ホワイトクリスマス。綺麗だなあ……」

「あ……あのさ、真神理愛。俺、決着をつけたいと思うんだ。やっぱこういうのは、男が先に言うもんだって思ってたさ」

「何、どうしたの、かしこまって？」

聖夜さんは、意を決したのか、真剣な顔つきで、真っ直ぐに私を見る。

「——俺は、お前の事が好きだ。世界中の誰よりも、お前が好きで、この気持ちだけは、どんな奴にだって負けない。……俺が、真神理愛の事を好きになったのは、もう随分と前なんだぜ。まだ俺が二年の頃、真神理愛が、一年の頃だったかな。その時から気になって、気付いたら、どうしようもないくらいに好きになってた。ずっと告白しようと思ってたけど、関係が壊れるのが怖くて、ずっと逃げてた。でもやっと決心したんだ。お前に、この気持ちを伝える決心を……真神理愛、きつと幸せにする、だから……俺と、付き合ってくれ！」

謎が解けた。二つ目の願いは、根本的に叶っていなかったんだ。

二つ目の願いは、両想いになる事だった。でも、魔法で願いを叶える前から、私達は両想いだったんだ。

馬鹿馬鹿しい。馬鹿馬鹿し過ぎて、逆に笑みがこぼれてしまう。

ついでに涙も溢れてくる。

「真神理愛？ どうした、何かまずい事でも言っ……」

「違うの！ 私も同じだったから。ずっと前から聖夜さんの事が好きで、お付き合いできたら良いなって。こんなに早く両想いだったなら、もっと早く告白してれば良かった！」

うん、全部の肩の荷が、降りたような気分だ。良かった、本当に

良かった。

ホワイトクリスマス。白い雪の幻想が、二人で一つの恋物語を彩る。街灯のキャンドルが、二人の道を照らし出して、静かに歩を進め出す――。

真神理愛 編完（後書き）

これにて『真の神、理をもって愛となせ』は完結します。随分と描写不足な点が、たくさんになってしまいました。

実は本編中で、考えていたお話がいっぱいありましたが、随分と削減して今に至ります。

真神理愛と聖夜の二人に絞って、余計な要素は入れないようにしました。

さて、これは誕生日記念贈呈作品なのですが、一つの作品として見てもえれば嬉しいです。

かなり遅くなりました。

まだ見てもらえているかな？

誕生日と同時に、受験などへの応援も兼ねさせてもらっよ。では、これにて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8230v/>

真の神、理をもって愛となせ

2011年10月21日02時10分発行